

# 土佐国衙跡発掘調査報告書

## 第7集

—— 松ノ下・南屋敷地区の調査 ——

昭和62年 3 月

南国市教育委員会

## 序

南国市比江地区は、太平洋に面した高知県中央部に位置する肥沃な土地、温暖な気候に恵まれた“天恵の地”香長平野の一角にあります。

この地には、古代律令制下における土佐の国府が置かれ、この地の政治・経済・文化の中心地として栄えました。昨今では「土佐のまほろば」の呼称を得て、広く市民の心の拠りどころとして親しまれています。

昭和54年度から高知県教育委員会のご尽力により実施されてきました土佐国衙跡発掘調査は、古代の国府を解明する上で、真に有意義なものであったと思量いたしております。

昭和61年度は、これ迄の発掘成果をふまえた上で、南国市教育委員会が事業主体となり、高知県教育委員会の全面的なご協力を得て、発掘調査を実施いたしました。松の下、南屋敷地区を調査し、古代の官衙に関連すると思われる掘立柱建物址4棟、溝など、政庁の位置を示唆するような貴重な遺構が、又中世の建物址・集石墓なども確認されました。

本報告書は、これらの発掘調査の成果をまとめたもので、文化財保護及び学術研究の分野においても本書が役立てられれば幸甚に存じます。

最後に、今回の調査にあたりご指導をいただいた文化庁・奈良国立文化財研究所をはじめ、調査指導をいただいた先生方、終始ご協力を願った高知県教育委員会文化振興課、ならびに地権者の方々、そして調査にご協力下さった地元比江地区の皆様、国府史跡保存会の皆様方に心から感謝を申し上げる次第であります。

昭和62年3月31日

南国市教育委員会

教育長 鈴 江 廣 幸

## 例 言

1. 本書は、南国市教育委員会が国庫補助を受けて、昭和61年度に実施した土佐国衙跡発掘調査（重要遺跡確認調査）の概要報告である。
2. 発掘調査は、高知県教育委員会の全面的協力を受け実施し、佐久間豊氏（文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官）の指導を得た。
3. 発掘調査の体制は、次のとおりである。

調査顧問 岡本健児（高松短期大学教授）  
主任調査員 森田尚宏（高知県教育委員会文化振興課主事）  
調査員 下村公彦（ 〃 〃 主幹）  
総 務 浜田清貴（南国市教育委員会社会教育課主事）
4. 本書の執筆、編集は森田が行った。執筆にさいしては、調査顧問岡本健児氏の指導を得た。
5. 遺構については、S B（建物址）、S T（竪穴状遺構）、S K（土壌）、S D（溝）、S A（柵列・堀）で標示し、遺構番号は『土佐国衙跡発掘調査報告書』第1～6集からの通し番号である。
6. 出土遺物の写真図版番号については、実測図の番号と一致している。
7. 遺構の測量は、公共座標第Ⅳ系により実施しており、標高は海拔高である。
8. 調査にあたっては、土地所有者をはじめとして地元比江地区の方々に御協力をいただき、また、現場作業員及び整理事業員のみなさんの御援助に対し、記して感謝する次第である。
9. 出土遺物は、南国市教育委員会において保管している。

# 本文目次

I	発掘調査にいたる経過	1
II	松ノ下地区	6
1	調査方法と経過	6
2	調査概要	6
3	層序	6
4	遺構と遺物	8
(1)	包含層出土遺物	8
(2)	古墳時代	9
(3)	古代	9
(4)	中世	20
III	南屋敷地区	27
1	調査方法と経過	27
2	調査概要	27
3	層序	27
4	遺構と遺物	29
(1)	包含層出土遺物	29
(2)	古代	34
(3)	中世	35
IV	総括	37



## 挿 図 目 次

第1図	土佐国府跡位置図	第17図	S D44セクション図
第2図	土佐国府跡第1～18次発掘区設定図	第18図	松ノ下地区包含層(第Ⅲ・Ⅳ層) 出土遺物
第3図	松ノ下地区発掘区設定図	第19図	松ノ下地区包含層(第Ⅰ・Ⅲ層)出土遺物
第4図	松ノ下地区発掘区セクション図	第20図	松ノ下地区遺構(S K56・59～61) 出土遺物
第5図	松ノ下地区遺構平面全体図	第21図	松ノ下地区遺構(S K63) 出土遺物
第6図	S B44	第22図	松ノ下地区遺構(S K64, S T18, S D41, 集石墓, P 1・2) 出土遺物
第7図	S B45	第23図	松ノ下地区遺構(P 3～22) 出土遺物
第8図	S B46	第24図	南屋敷地区包含層(第Ⅰ～Ⅲ層) 出土遺物
第9図	S B47	第25図	南屋敷地区包含層(第Ⅲ層), 遺構 (S K65・66, S D44) 出土遺物
第10図	S K59・61・63	第26図	南屋敷地区遺構(S D45, P 1～6) 出土遺物
第11図	S B48		
第12図	集石墓		
第13図	宮の西地区出土墨書土器		
第14図	南屋敷地区発掘区設定図		
第15図	南屋敷地区発掘区セクション図		
第16図	南屋敷地区遺構平面全体図		

## 表 目 次

第1表	土佐国府跡発掘調査一覧表(第1～18次調査)
第2表	松ノ下地区掘立柱建物址計測表
第3表	松ノ下地区土壌計測表
第4表	松ノ下地区溝計測表
第5表	南屋敷地区溝計測表
第6表	南屋敷地区土壌計測表
第7表	出土遺物計測表

## 図 版 目 次

- |      |  |                                |
|------|--|--------------------------------|
| 図版 1 | 土佐国府跡航空写真  |                                |
| 図版 2 | 松ノ下地区調査前全景（西より）  | 遺構検出状態（南より）                    |
| 図版 3 | 遺構完掘状態（南より）  | 遺構完掘状態（南より）                    |
| 図版 4 | S B 44, S D 40・41検出状態（北より）                             | S B 44, S D 40・41検出状態（南より）     |
| 図版 5 | S B 44北柱穴検出状態（北より）                                     | S B 44, S D 40・41（北より）         |
| 図版 6 | S B 45（南より）  | S B 46・47（南より）                 |
| 図版 7 | S K 59（南より）  | S K 61（南より）                    |
| 図版 8 | S K 63（南より）  | S K 61遺物出土状態（東より）              |
| 図版 9 | 集石墓検出状態（南より）   | 集石墓（東より）                       |
| 図版10 | S K 64（南より）  | P 4 遺物出土状態（南より）                |
| 図版11 | P 19遺物出土状態（南より）  | 第Ⅳ層遺物出土状態（東より）                 |
| 図版12 | 南屋敷地区調査前全景（西より）  | 遺構完掘状態（南より）                    |
| 図版13 | S D 44（南西より）   | S D 44（北東より）                   |
| 図版14 | S D 44西壁セクション  | S D 44遺物出土状態（北東より）             |
| 図版15 | S D 45東壁セクション  | P 1 遺物出土状態（南より）                |
| 図版16 | 松ノ下地区包含層（第Ⅲ・Ⅳ層），S K 59出土遺物                             |                                |
| 図版17 | 松ノ下地区 S K 61・63・64出土遺物                                 |                                |
| 図版18 | 松ノ下地区 S K 64, 集石墓出土遺物                                  |                                |
| 図版19 | 松ノ下地区集石墓, P 4・18出土遺物                                   |                                |
| 図版20 | 松ノ下地区 P 19・20, 南屋敷地区包含層（第Ⅲ層）出土遺物                       |                                |
| 図版21 | 南屋敷地区 S D 44・45, P 1 出土遺物                              |                                |
| 図版22 | 南屋敷地区 P 1・2 出土遺物 松ノ下地区 P 9 出土遺物 宮ノ西調査区出土墨書土器           |                                |
| 図版23 | 松ノ下地区包含層（第Ⅲ層）出土遺物                                      | 松ノ下地区包含層（第Ⅲ・Ⅳ層）出土遺物            |
| 図版24 | 松ノ下地区包含層（第Ⅲ層）出土遺物                                      |                                |
| 図版25 | 松ノ下地区包含層（第Ⅲ層）出土遺物                                      | 松ノ下地区 S K 56・59・61出土遺物         |
| 図版26 | 松ノ下地区 S K 61出土遺物                                       |                                |
| 図版27 | 松ノ下地区 S K 63出土遺物                                       |                                |
| 図版28 | 松ノ下地区 S K 63出土遺物 松ノ下地区 S K 64, S T 18, S D 40, 集石墓出土遺物 |                                |
| 図版29 | 松ノ下地区 P 3・5～11出土遺物                                     | 松ノ下地区 P 12～17・23出土遺物           |
| 図版30 | 松ノ下地区 P 21・22出土遺物                                      | 南屋敷地区包含層（第Ⅲ層）出土遺物              |
| 図版31 | 南屋敷地区包含層（第Ⅲ層）出土遺物                                      | 南屋敷地区 S K 65・68, S D 44・45出土遺物 |
| 図版32 | 南屋敷地区 P 2～6 出土遺物                                       |                                |

## I 発掘調査にいたる経過

土佐国衙跡は、南国市比江地区に所在しており、高知県の中央部、香長平野のやや北方に位置している。周辺の地形は、北に比江山をひかえ、南には香長平野が開ける国分川の沖積地であり、国衙跡の東から南を囲むように国分川が流れている。現状は、水田とビニールハウスが広がるのどかな田園地帯である。また、西方約1kmには土佐国分寺が位置しており、東に接しては白鳳時代の瓦を出土する比江廃寺跡が存在する。

比江地区一帯には、内裏、国庁、府中等のホノギ（小字）が多く残されており、国衙の位置を示す手懸りとして調査を進めてきたが、現在のところ政庁等の確実な位置<sup>(註1)</sup>を迫る遺構は、検出されていない。

本年度の調査は、国庫補助を受けての土佐国衙跡発掘調査（重要遺跡確認調査）の7年目であり、政庁確認にはいたらなかったが、新たな知見を得ることができた。調査対象地としては、昭和54年度以降の調査成果をふまえ、特に昭和59年度の調査結果をもとに松ノ下地区と南屋敷地区の2地区を選定した。

松ノ下地区は、昭和59年度に調査が行われ、規模の大きい柱穴をもつ掘立柱建物址が検出されている。今回は、この建物の規模と性格及び遺構の広がりを探ることを目的として、一昨年度の調査区に隣接する水田を対象地とした。

南屋敷地区は、松ノ下地区の西方100mの水田を対象地とし、官衙関連遺構の西への広がりを確認することにより、国衙域の範囲をつかむことを目的とした。

地形的には、松ノ下地区、南屋敷地区ともに、北の内裏地区に比べ一段低くなっており、従来から調査対象の中心としていた太郎三郎ヤシキ・府中・クゲ地区等と同じ面である。

調査は、測量も含め昭和61年10月16日に開始され、12月19日に終了した。調査面積は、松ノ下、南屋敷両地区を合わせて884㎡である。

今回までの調査では、古墳時代から中世にかけての遺構が発見されているが、調査の主たる目的である古代の遺構も掘立柱建物址を中心に検出されており、徐々にではあるが国衙の輪郭が現われている。しかし、政庁または国衙域を画する溝等の遺構確認にはいたっておらず、さらに確認調査を進めなければならない。古代以降、特に鎌倉時代の遺構についても、律令体制崩壊後の国衙の変化を知る上で重要な資料であり、検討を加えていかななければならない。

調査にあたっては、土地所有者である岡崎美枝氏及び小松洋子氏の全面的協力のもとに調査の承諾をいただいた。また、調査地周辺の土地所有者及び比江地区の方々、国府史跡保存会には、多大な御協力をいただき、ここに記して心からの感謝の意をあらわしたい。



第1図 土佐国府跡位置図 (1/50,000)

第1表 土佐国府跡発掘調査一覧表（第1～18次調査）

調査 次数	期 間	調査地区	調査の種類	検 出 遺 構			出 土 遺 物
				掘立柱建物址	溝 跡	そ の 他	
1	52. 2. 1 } 52. 2. 3	新 ラ 田	緊急発掘調査 (市道改良工事)			柱 穴	緑釉陶器
2	54. 1. 27 } 54. 2. 1	松 ノ 下	同 上	2 (中世)		柱 穴	
3	54. 2. 13 } 54. 3. 1	太郎三郎屋敷	同 上	3 (平安2)	2	土器溜1	黒色土器・瓦器 土師器・鉄釘
4	54. 4. 20 } 54. 5. 2	神 ノ 木 戸	重要遺跡 確認調査		3 (奈良末1・平安中2)	土 壙3	円面硯・黒色土器 須恵器・土師器
5	54. 8. 20 } 54. 9. 12	宮 ノ 西	緊急発掘調査 (市道改良工事)	2 (平安末～鎌倉)	4 (奈良末)	土 壙2	円面硯・転用硯 墨書土器 風字硯・緑釉陶器
6	54. 11. 6 } 54. 12. 11	ク ゲ 国 庁	重要遺跡 確認調査	1 (奈良末)	2 (平安前1)	柱 穴 (中 世)	円面硯・青 磁 白 磁
7	55. 9. 28 } 55. 10. 4	クボノヤシキ 荷 鞍 左 が 内	緊急発掘調査 (市道改良工事)		1	土 壙1	須恵器・青 磁 常 滑
8	55. 11. 17 } 55. 12. 15	ダ イ リ	重要遺跡 確認調査	5 (平安3)	1	竪穴住居3 貯蔵穴2	須恵器(横釜) 緑釉陶器
9	56. 9. 10 } 56. 11. 4	内日吉のうち 府 中	同 上	7	5	竪穴住居2 土 壙7	円面硯 緑釉・陶器
10	56. 10. 8 } 56. 10. 19	神 ノ 木 内 日 吉	緊急発掘調査 (市道改良工事)		1	柱 穴	
11	57. 9. 17 } 57. 11. 6	内 日 吉 太郎三郎屋敷	重要遺跡 確認調査	11 (奈良6・平安2)	13 (奈良5)	竪穴住居2 土 壙16	内面硯・瓦器 青磁・白磁
12	58. 10. 5 } 58. 11. 7	内 裏 堂 ケ 内	同 上	6 (奈良～平安)	1 (6C末～7C初)	竪穴住居5 土 壙5	須恵器・土師器
13	58. 11. 22 } 58. 12. 10	内 日 吉 ク ゲ	同 上	2 (奈 良)	2 (中 世)	井 戸1 土 壙8	須恵器・瓦器
14	59. 10. 1 } 59. 11. 1	一 ノ 坪	重要遺跡 確認調査	5 (奈良～平安)	3	竪穴住居1 棚 列5 (奈良～平安)	須恵器・土師器
15	59. 11. 16 } 59. 11. 22	鍛 冶 給	同 上	1 (奈良～平安)		土 壙1	◇
16	59. 11. 30 } 60. 1. 10	松 ノ 下	同 上	5 (奈良～平安)		竪穴住居1 土壙4 欄列1	◇
17	61. 10. 16 } 61. 11. 29	松 ノ 下	同 上	4 (奈良～平安)	4	竪穴住居1 土壙10(平安3)	刻書土器(須恵器)
18	61. 11. 12 } 61. 12. 19	南 屋 敷	同 上		1 (奈 良)	土 壙15	須恵器・土師器



第2図 土佐国府跡第1～18次発掘区設定図 (1/4,000)

## Ⅱ 松ノ下地区

### 1 調査方法と経過

今回の調査対象地は、南国市比江字松ノ下518-1番地であり、昭和59年度に調査対象地とした水田の西に隣接する南北に長い水田である。標高は約16.5mを測る。発掘区は、公共座標を基準として、一昨年度の調査により検出された掘立柱建物址の規模を確認するために東の畦畔によせ、幅4m、長さ56mのトレンチとし、調査を開始した。そして、遺構の検出状況に応じて、随時拡張した。

一昨年度の調査結果によれば、発掘区の南部から注目すべき掘立柱建物址が検出されていることから、今回も南部から着手し、順次北部へと調査を進めた。耕作土の掘削については、必要に応じて機械力を導入し、以下、包含層及び遺構検出面までは人力により掘り下げた。

調査の結果、やはり古墳時代から中世にかけての遺構、遺物を検出したが、量的には中世の柱穴が多く、遺物も中世のものが過半数を占めていた。遺構の検出状況は、発掘区全面におよんでおり、中でも中央部から南部にかけて集中していたので、この範囲を西側へ4m幅で、できるかぎり拡張し、官衙関連遺構の検出に努めた。また、南部は中世の遺構面の発掘を終えた後、さらに掘り下げ古代の遺構面へと調査を進めた。

調査期間は、測量も含め昭和61年10月16日から11月11日、同年11月14日から11月29日までの35日間であり、最終的な調査面積は470㎡であった。

### 2 調査概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は、竪穴住居址1棟、掘立柱建物址6棟、土壇9基、溝4条及び柱穴群である。出土遺物は、約1200点と従来の調査に比べやや少なく、量的には土師質土器が大半を占めている。

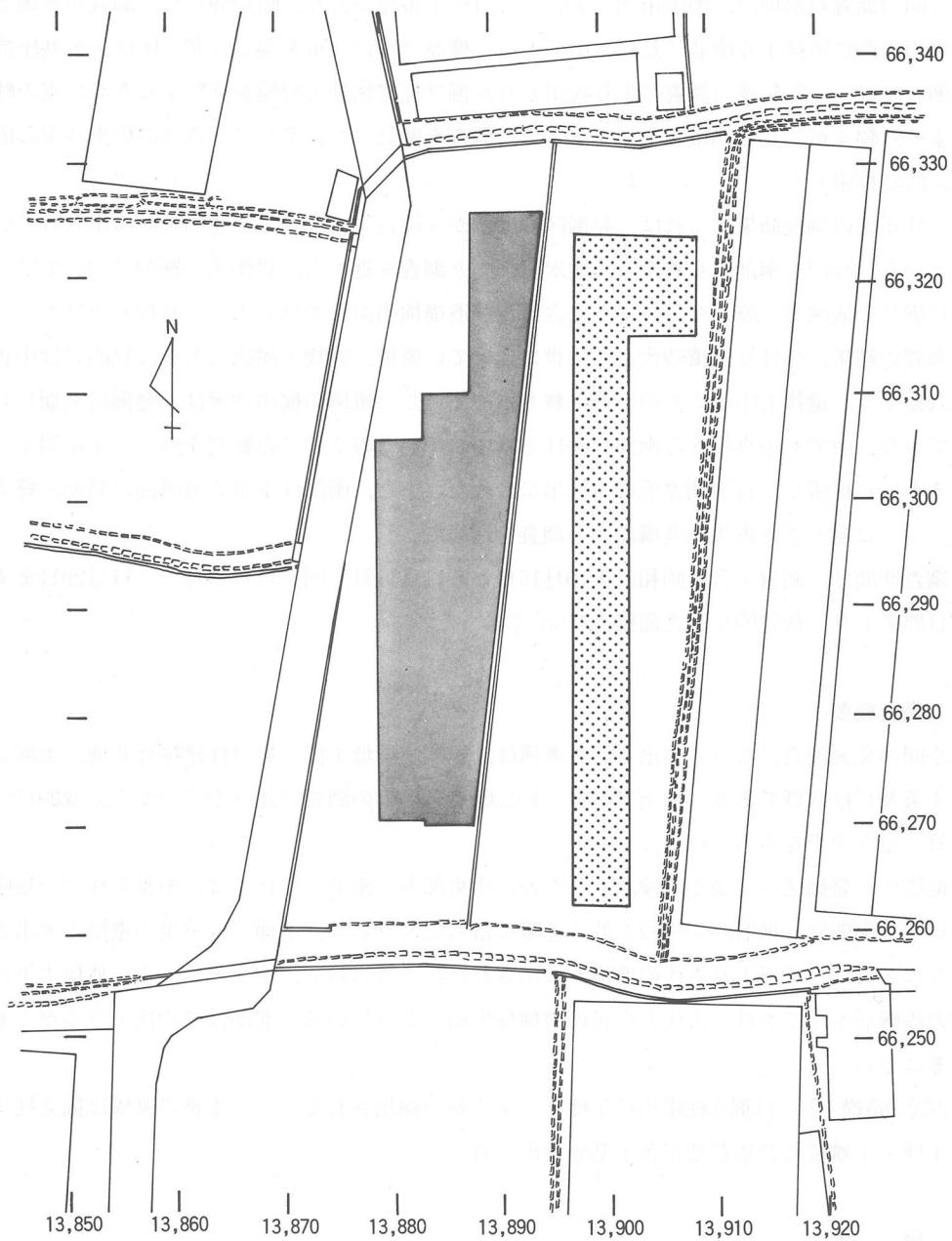
遺構は、発掘区の全域から検出されたが、中央部から南部にかけては、中世の柱穴が集中していた。南部は、地形的に一段と低く急激に落ち込んでおり、上面では中世の遺構が検出され、さらに30cmほど下面より古代の遺構が検出された。これに対し、中央部は高く、耕作土下に基盤の砂礫層が出ており、古代と中世の遺構検出面になっている。北部はやや低くなるが、あまり差はない。

古代の遺構としては掘立柱建物址4棟と土壇3基が検出されており、中世の遺構は掘立柱建物址1棟と土壇墓及び集石墓が各1基が検出された。

### 3 層 序

松ノ下地区における基本層序は、次のとおりである。

第Ⅰ層 耕作土



第3図 松ノ下地区発掘区設定図 (S=1/600)



第Ⅱ層 灰褐色粘質土

第Ⅲ層 暗褐色粘質土

第Ⅳ層 淡黒色粘質土

第Ⅴ層 黒色粘質土

第Ⅵ層 黄褐色粘質土

第Ⅰ層は約20cmを測る。第Ⅱ層は15～20cmを測り、近～現代の陶磁器片を含む新しい時期の二次堆積土である。第Ⅲ層は、土師質土器の細片を多量に含む中世の包含層である。第Ⅳ層及び第Ⅴ層は、黒ボクを主体とした類似する粘質土である。第Ⅳ層はやや褐色をおび、土師質土器を含んでおり、第Ⅲ層と同じく中世の包含層である。第Ⅴ層は若干の須恵器と土師器を含んでおり、古代の包含層ではあるが、遺物は少なく無遺物層に近い。

中世の遺構面は第Ⅳ層上面であるが、第Ⅴ層までの間においても柱穴が検出されており、第Ⅳ層中にも遺構の掘り込み面が認められる。古代の遺構面は第Ⅴ層中に存在するが、柱穴の埋土も第Ⅴ層と同じ黒色土であり、第Ⅵ層上面まで下げなければ確認できない。

発掘区の微地形を観察すると、中央部にみられる基盤の砂礫層は、南部では急激に落ち込み検出されない。西の市道部分の調査では、地表下 1.8～2 mでこの砂礫層が検出されている。この落ち込みは、国分川の旧流路の一部ではないかとみられ、流路の移動後に多量の黒ボクが流入し、堆積したものと考えられる。また、南部では第Ⅵ層中に赤ホヤとみられる火山灰が部分的に集中し、検出された。

遺構の残存状況は全般的に良好であり、特に南部では堆積が厚く、削平による影響はみられない。中央部から北部にかけては、一部削平を受けているが、柱穴の深さなどからみると、その影響はわずかである。

#### 4 遺構と遺物

##### (1) 包含層出土遺物 (第18図1～22, 第19図23～44)

遺物包含層は第Ⅲ～Ⅴ層であり、第Ⅲ層からの出土遺物が大半を占める。出土遺物は、中世の土師質土器が最も多く、他に須恵器、土師器、黒色土器、青磁、白磁、天目茶碗等がみられる。以下、第Ⅲ層出土遺物を中心に述べる。

##### 須恵器 (第18図1～19)

1～5は古墳時代の須恵器杯であり、1～3は蓋、4・5は身である。蓋は天井部が丸味をおび、身の受部立上りは短かく内傾する。6～19は古代の須恵器であり、18・19のみ第Ⅳ層出土である。6・7は擬宝珠形のつまみをもつ杯蓋である。8～15は杯身であり、やや外傾する高台をもつ。16・17は皿であり、2～3 cmの器高をもつ。18は擬宝珠形のつまみをもつ、ほぼ完形の杯蓋であり、焼歪みがみられる。19は杯身であり、やはり外傾する高台をもつ。

##### 土師器・黒色土器 (第18図20～22, 第19図23～26)

20～24は土師器であり、20は杯、21は皿、22・24は甕である。20・21の内面にはヘラ磨きが

施される。25・26は内黒の黒色土器であり、25は外面にロクロ目を残し、26は断面三角形の小さな高台をもつ。

#### 土師質土器（第19図27～40）

27・28は小皿、29・30は杯であり体部は直線的に開く。いずれもヘラ切り底部をもち、内面にロクロ目を残す。31は外傾する高台をもつ椀である。

32～35は回転糸切り底の椀であり、32はほぼ完形で緩やかに開き、口縁部はやや外反する。33は外面にわずかなヘラ磨きがみられる。36は杯であり、体部はやや外反し開く。37は皿であり指頭圧痕を残す。38～40は小杯と小皿であり、いずれも回転糸切り底で内面にロクロ目を残す。

#### 輸入磁器（第19図41～43）

41・42は青磁の口縁部と底部であり、41は鎗蓮弁、42は細蓮文と内面に印花文がみられる。43は白磁の底部であり、削出しの高台をもつ。

#### 国産陶器（第19図44）

第Ⅰ層出土の瀬戸・美濃系の天目茶碗であり、茶褐色の鉄釉が施される。

### (2) 古墳時代

#### 竪穴住居址

##### S T 18（第5図）

古墳時代の遺構としては、竪穴住居址1棟（S T 18）を発掘区の北西部隅において検出した。検出部分は、方形の竪穴住居址の一部と考えられ、一辺 3.4mを測り一部コーナーがかかっている。壁高は15cm前後と浅く、床面には柱穴が2個検出され、中央部にもピットがみられる。埋土は暗茶褐色粘質土であり、上部は第Ⅲ層と同じである。

#### 出土遺物（第22図96）

S T 18の出土遺物としては、埋土中から須恵器の細片、柱穴から96の杯身が出土している。96は平坦な底部を持ち、器高も低く、受部の立上りは短かく内傾気味に立上る。底部にヘラ削りが施される。

### (3) 古代

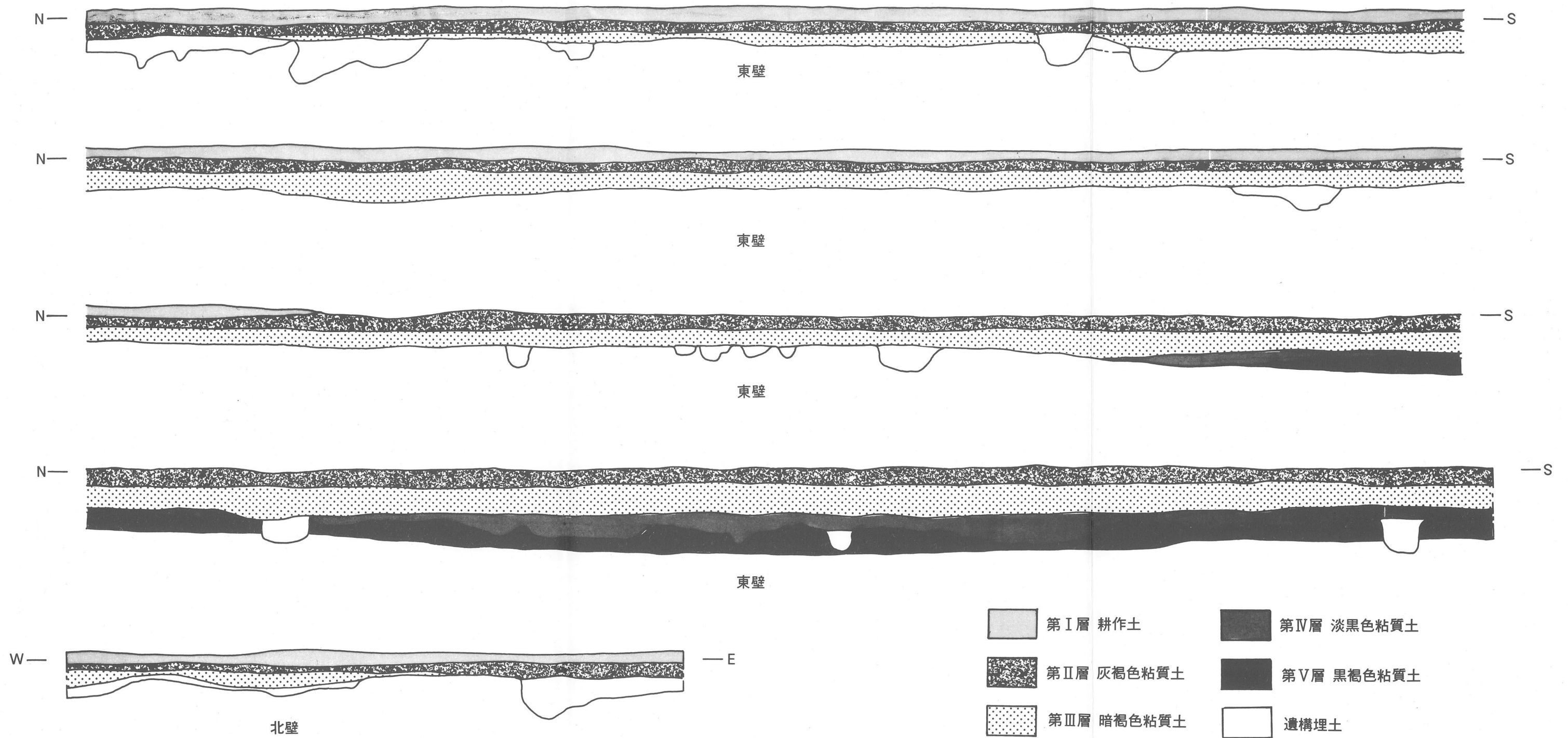
古代の遺構としては、掘立柱建物址4棟と土壌3基を検出した。

#### 掘立柱建物址

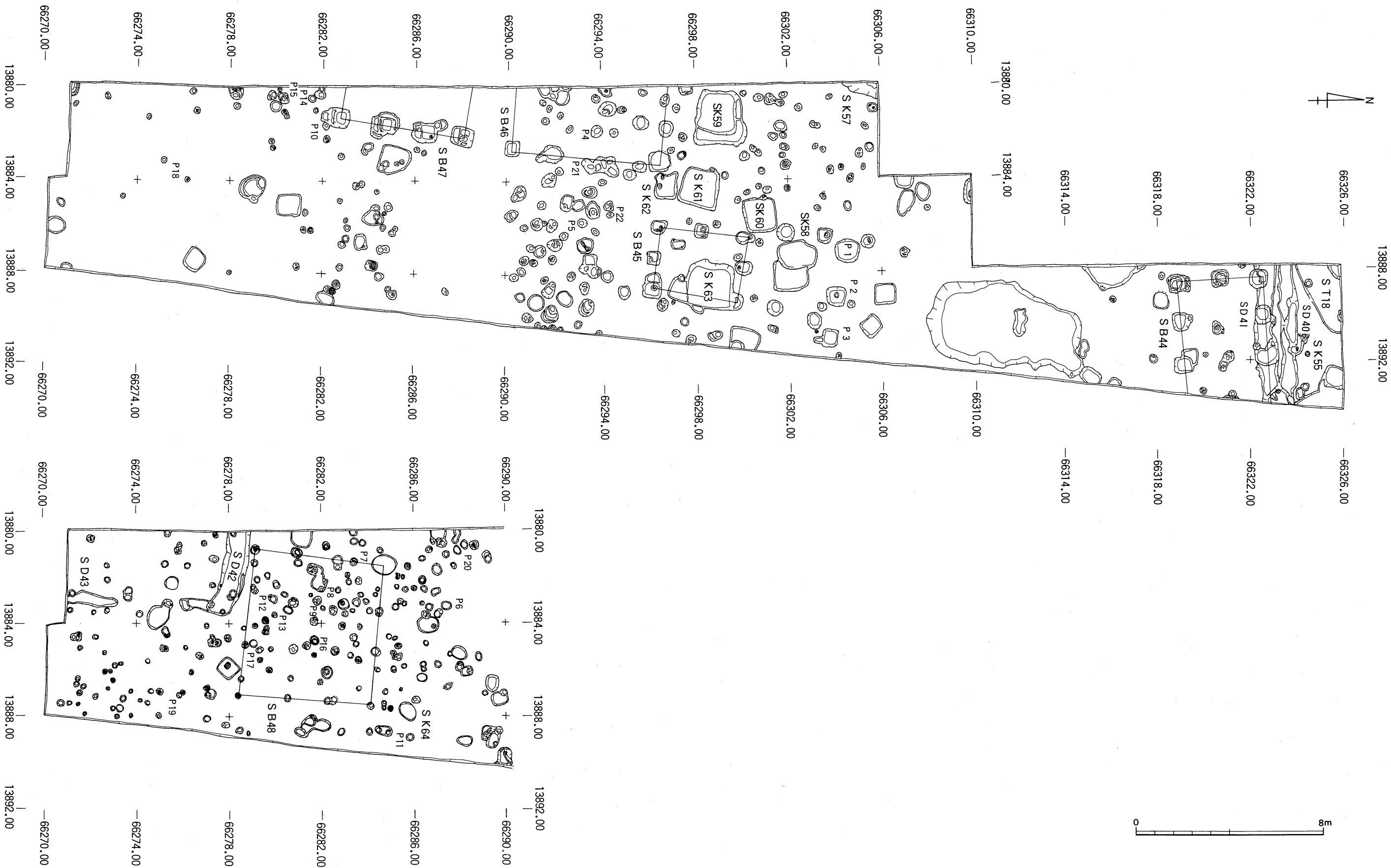
##### S B 44（第6図）

S B 44は発掘区の北端部において検出された。検出面は第Ⅵ層上面であり、第Ⅲ層を掘り下げた段階でプランを確認した。北辺の柱穴3個はS D 41に切られているが、P 1はプラン検出時に確認された。P 2・3はS D 41を完掘後プランを検出した。

検出された柱穴からみれば、梁間2間、桁行2間以上の規模をもつ東西棟と考えられ、東側は調査区外に続いている。棟方向は、N-86°-Eであり、北に対しほぼ直角である。梁間、桁行ともに 3.6mを測り、柱間距離はすべて 1.8mを測る。



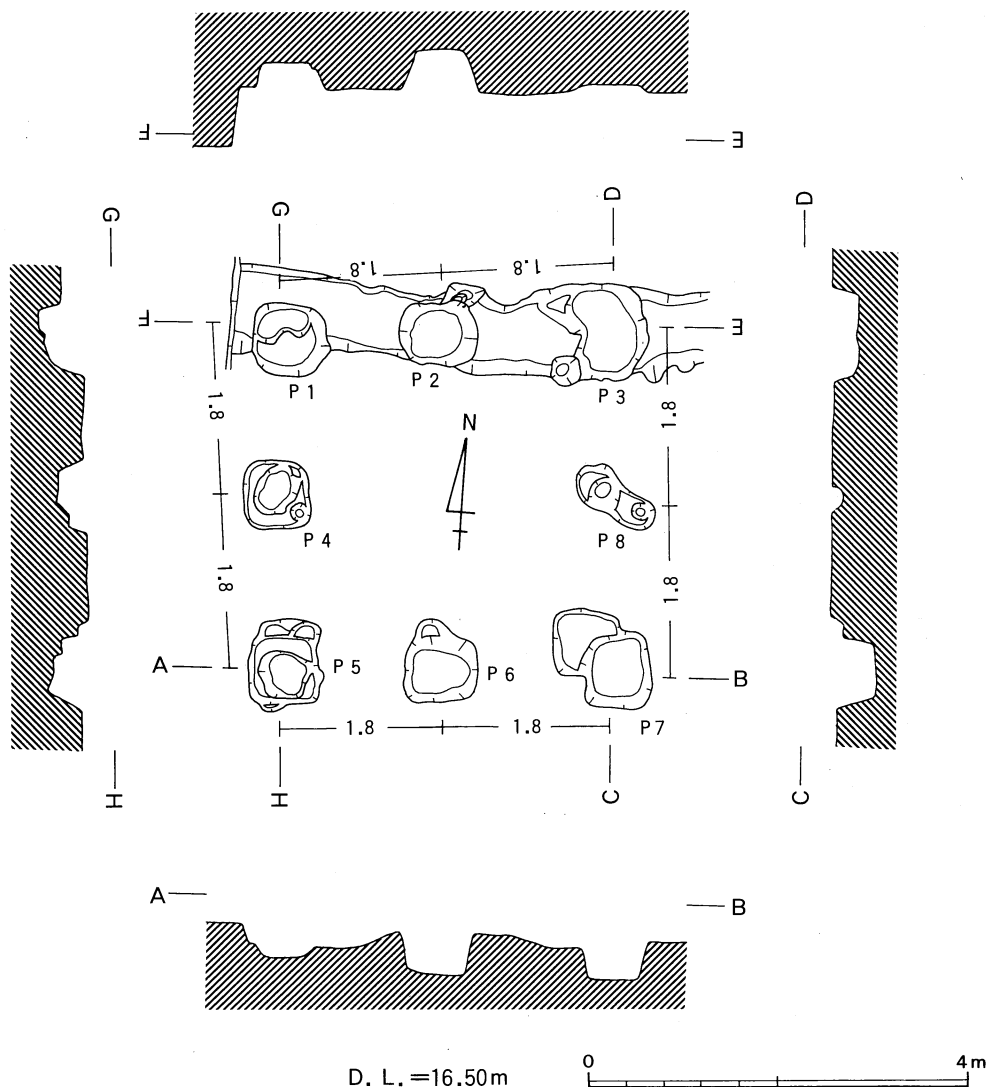
第4図 松ノ下地区発掘区セクション図D. L. =16.40m



第5図 松ノ下地区遺構平面全体図 (1/160)

柱穴の掘方は一辺70cm前後を測る方形であり、深さは30～40cmを測る。P 4・5の底部には直径40～50cmを測る柱痕がみられ、P 7には浅い柱穴が重複している。P 8は不定形の小ピットであり、出土遺物もなくS B44に伴うものか疑問であるが、柱間距離等からみれば、中間の柱穴とみることができる。埋土は暗褐色粘質土であり、若干の土師器と須恵器の細片が出土したが、実測可能なものはみられなかった。

S B44は、その検出位置、棟方向、柱穴の規模と柱間距離等からみれば、昭和59年度の調査において検出されたS B39につながる同一の建物と考えられ、中間部は未調査であるが、梁間2間、桁行10間と東西に長い建物と推定される。



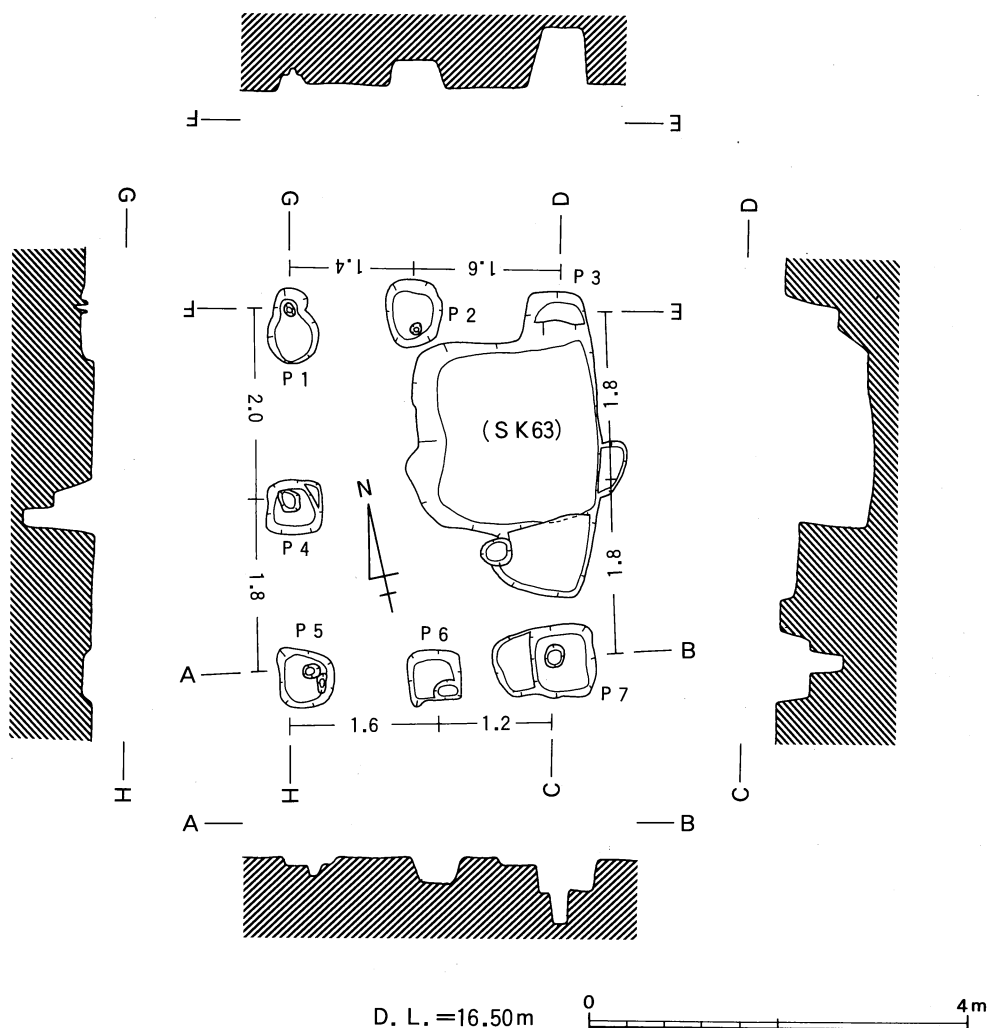
第6図 S B44

# S B45 (第7図)

S B45は、発掘区のほぼ中央部において検出された。検出面は第Ⅵ層上面であり；やはり第Ⅲ層を掘り下げた段階でプランを確認した。東辺中央部の柱穴はS K63と重複しており確認されず、P 3も南半部を切られている。

建物の規模は、梁間、桁行ともに2間である。梁間1.8～2.0m、桁行3.6～3.8mを測り、南北にやや長い。南北棟と考えれば、棟方向はN-10°-Eである。柱間距離は、梁間1.2～1.6m、桁行1.8～2.0mを測り、梁間の柱間はやや短い。

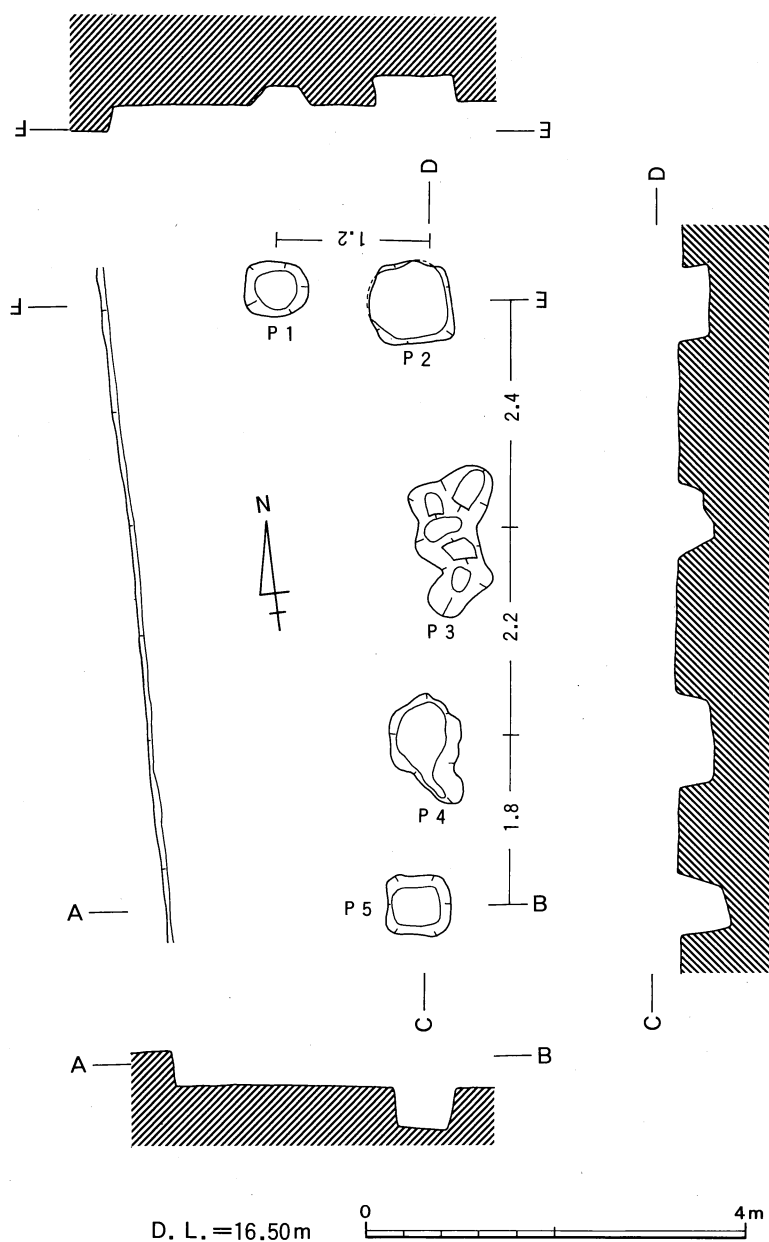
柱穴の掘方は、一辺50～60cmを測るほぼ方形を呈するが、不定形の柱穴も存在する。深さは20～70cmを測り、P 4・5・7の底部には直径20cm前後の柱痕がみられ、P 7には浅い柱穴が重複している。埋土は暗褐色粘質土であり、出土遺物は土師器の細片のみであった。



第7図 S B45

# **S B 46 (第 8 図)**

S B 46は、発掘区のほぼ中央部において検出されており、S B 45の南西約 3 m に位置している。検出面は砂礫を多く含む第Ⅵ層上面であり、第Ⅲ層を掘り下げた段階でプランを確認した。柱穴は東辺が検出されているが西辺は発掘区外へ延びており完掘できなかった。



第 8 図 S B 46

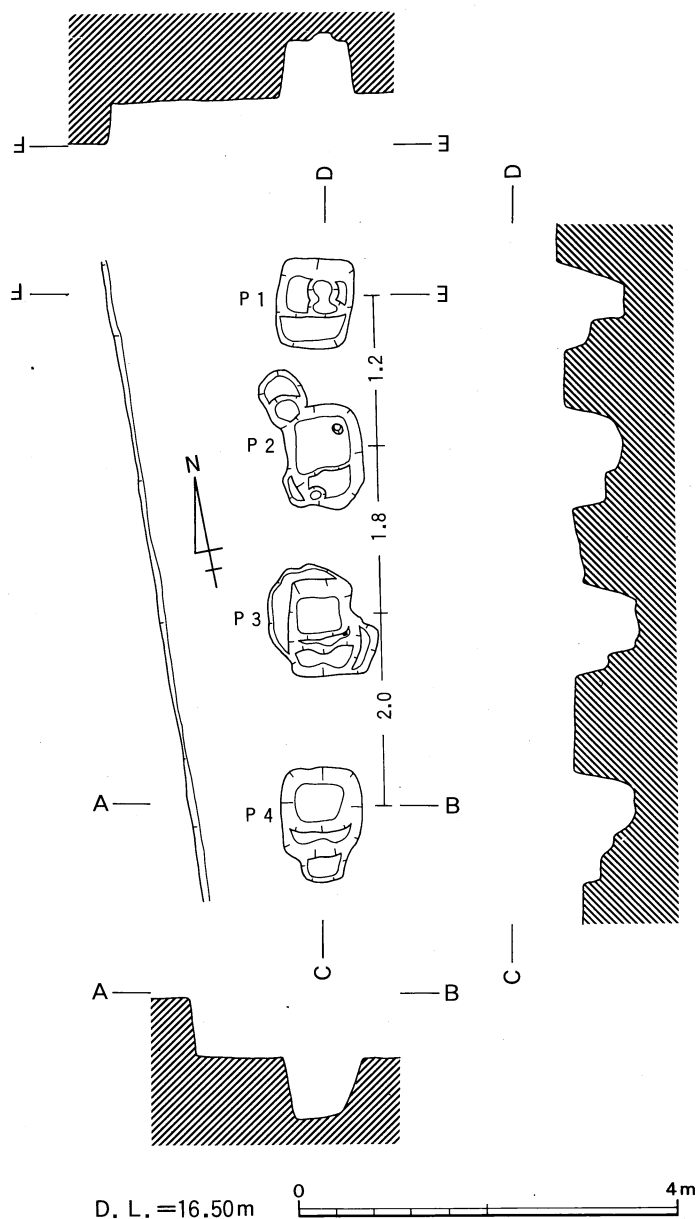
建物の規模は不明であるが、南北棟と考えれば、梁間2間以上、桁行3間と推定される。桁行は6.4mを測り、柱間距離は1.8~2.4mと不規則である。梁間は、北辺に1個の柱穴が確認されており、柱間距離は1.2mを測る。棟方向はN-8°-Eを測る。

柱穴の掘方は60~80cmを測る方形のプランをもつP1・2・5と、不定形を呈するP3・4

が存在する。深さは20~40cmを測るが柱痕はみられない。埋土は茶褐色粘質土に黄褐色粘質土が混じり、堅くしまっている。出土遺物はほとんどみられず、上面において土師質土器が混入している。

#### SB47 (第9図)

SB47は、発掘区の南部において検出されており、SB46の南1.6mに位置している。検出面は第VI層上面であるが、地形的に南部が急激に低くなる関係から、地表下60cm前後と低く、第V層を掘り下げた段階でプランを確認した。柱穴は、発掘区の西壁にそっており、東側に続く柱穴は存在しないので、SB46と同じく東辺のみが検出されているものと考えられ、建物の大部分は発



第9図 SB47



掘区外へと延びており、全貌はつかめなかった。

建物の規模は不明であるが、S B46同様南北棟と考えれば、桁行3間であり、梁間は不明である。桁行は6mを測り、柱間距離は1.2~2.0mと南へ広がっている。検出された東辺の柱穴は、S B46の東辺柱穴と同じくN-8°-Eの棟方向をもち、延長線上に連なっていることから、S B46となんらかの関係をもつ建物ではないかと考えられる。

柱穴の掘方は、いずれも約80×100cmを測るやや南北に長い方形のプランをもち、深さは70cm前後を測る。今回、松ノ下地区から検出した掘立柱建物址群の中では、最も規模が大きく、しっかりとしている。また、P1~4のいずれにも南側に小段が存在しており、柱穴の段掘りがみられる。底部に柱痕はみられないが、埋土の断面では、わずかな色調の違いから、直径約20cmの柱痕を確認することができた。

埋土は、黒褐色粘質土に若干黄褐色粘質土が混入しており、柱穴の下半部が砂礫層を掘り込んでいるところからかなりの小礫もみられ、非常に堅くしまっている。出土遺物には、須恵器杯口縁及び土師器片が若干存在するが、実測可能なものはみられなかった。

## 土 壙

### S K59 (第10図)

S K59は、発掘区のほぼ中央部、西壁にそって検出されており、S B45の西約4mに位置している。検出面は第Ⅵ層上面であり、第Ⅲ層を下げた段階でプランを確認した。

規模は、長径2.2m、短径2.0mを測り、長軸方向はN-83°-Wである。平面形はほぼ正方形であり、深さは約90cmと非常に深く、壁はほぼ垂直である。底面は西半部がやや落ち込んでいるが、ほとんど平坦である。北壁から東壁にかけては、幅30cm、深さ50cmほどの段部がみられる。壁面の状態からみると60cmほど、基盤の砂礫層を掘り込んでいる。

埋土は、上部に10cm前後の茶褐色粘質土がみられるが、下部はすべて暗褐色粘質土が混入する砂礫土であり、非常に堅くしまっている。遺物は、埋土の中ほどからややまとまりをもち、約50点ほど出土しており、底面上出土の土器もみられる。

### 出土遺物 (第20図46~53)

46は内黒の黒色土器であり、緩やかに内湾し開く。47~50は杯であり、49は口縁部のみであるが、いずれも底部ヘラ切り、内面にロクロ目がみられる。47~49は同じ器形であるが、50は器高が高く、体部は直線的に開いており、底面上からほぼ完形で出土している。51は碗の口縁部であり、52は高い高台をもつ底部である。53はやや細身の土鍾である。

### S K61 (第10図)

S K61は、発掘区の中央部において検出されており、S K59の東約1mに位置している。検出面はS K59と同じく第Ⅵ層上面であり、第Ⅲ層を掘り下げた段階でプランを確認した。

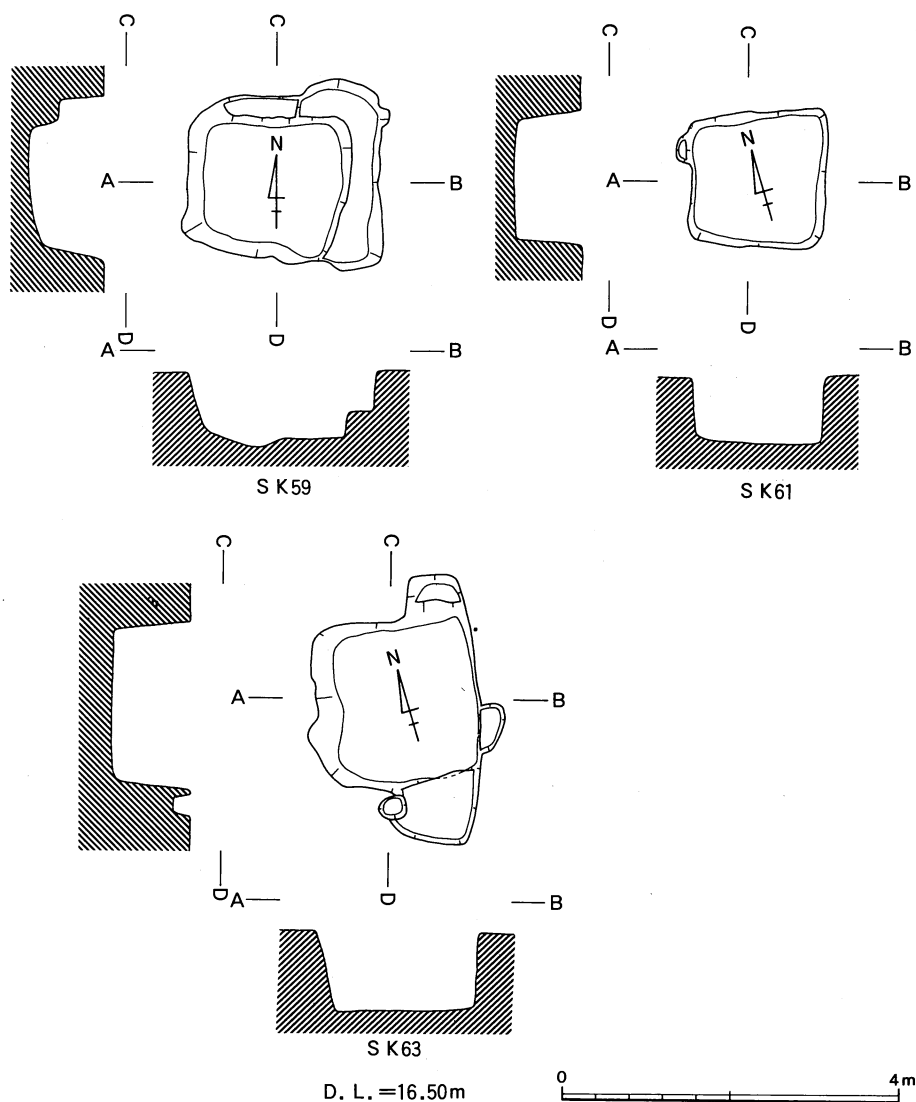
規模は長径1.85m、短径1.78mを測り、長軸方向はN-18°-Eである。平面形はやや東が広

がる正方形を呈する。深さは72cmを測り、やはり砂礫層を60cmほど掘り込んでいる。壁は垂直であり、底面は水平である。

埋土はS K 59と同じく褐色粘質土を含む砂礫土であり、堅くしまっている。出土遺物は 100点近くを数え非常に多く、埋土中に散在していた。

#### 出土遺物 (第20図54~71)

55は高台をもつ須恵器の杯身である。56~60は皿, 61~69は杯であり, 62・67は底部を欠くが, いずれも底部ヘラ切り, 内面にはロクロ目を残すものである。口縁部はやや外反するものが多くみられるが, 61・62・67・68のようにそのまま丸く終るものも存在する。70は直径2cmとやや太い土錘である。71は水平な先端部をもつ鉄器であり, 形態からみれば鉄鏝と考えられる。



第10図 S K 59・61・63

### **S K 63 (第10図)**

S K 63は、発掘区の中央部において検出されており、S K 61の東約 2.0mに位置している。検出面はS K 59・61と同じく第Ⅵ層上面であり、第Ⅲ層を掘り下げた段階でプランを確認した。

規模は長径2.03m、短径1.92mを測り、長軸方向はN-8°-Eである。平面形はほぼ正方形を呈する。深さは1.05mと3基の土壌の中では最も深く、やはり砂礫中に90cm前後掘り込まれている。壁は垂直であるが、西壁はやや傾斜をもっており、床面は水平である。

埋土は、褐色粘質土を含む砂礫土であり、他の土壌と同じく堅くしまっており、部分的に黄褐色粘質土のブロックがみられる。出土遺物は最も多く、中央部からは甕片、砥石などが一括廃棄された状態で出土している。

また、S K 63はS B 45の柱穴を切っており、時期的に新しいことが確認された。

### **出土遺物 (第21図72~87)**

72は杯蓋であり、古墳時代の須恵器が混入したものである。73・74は内黒の黒色土器であり、断面三角形の短い高台がみられる。75・76は皿、77~81は杯であり、S K 59・61の出土遺物と同じく底部ヘラ切り、内面にロクロ目を残すものである。杯の口縁部はやや外反しており、81は他の杯に比べやや器高が高く、直線的に開く。82・83は甕であり、82はやや内湾気味に直立する口縁部の下方に断面三角形の小さな鰐を貼付する。83は直立する胴部から口縁部は大きく屈曲し開く。口縁端部は上方へ肥厚し、内傾する面をなす。84・85は砂岩の砥石であり、86・87はかなりの太さをもつ鉄釘である。

## **(4) 中 世**

中世の遺構は、溝、土壌、集石墓及び柱穴群であるが、柱穴群は1棟の掘立柱建物を除き、まとまらなかった。

### **掘立柱建物址**

### **S B 48 (第12図)**

S B 48は、発掘区の南部において検出されており、中世の柱穴が集中している。検出面は第Ⅳ層上面であり、第Ⅲ層を掘り下げた段階でプランを確認した。

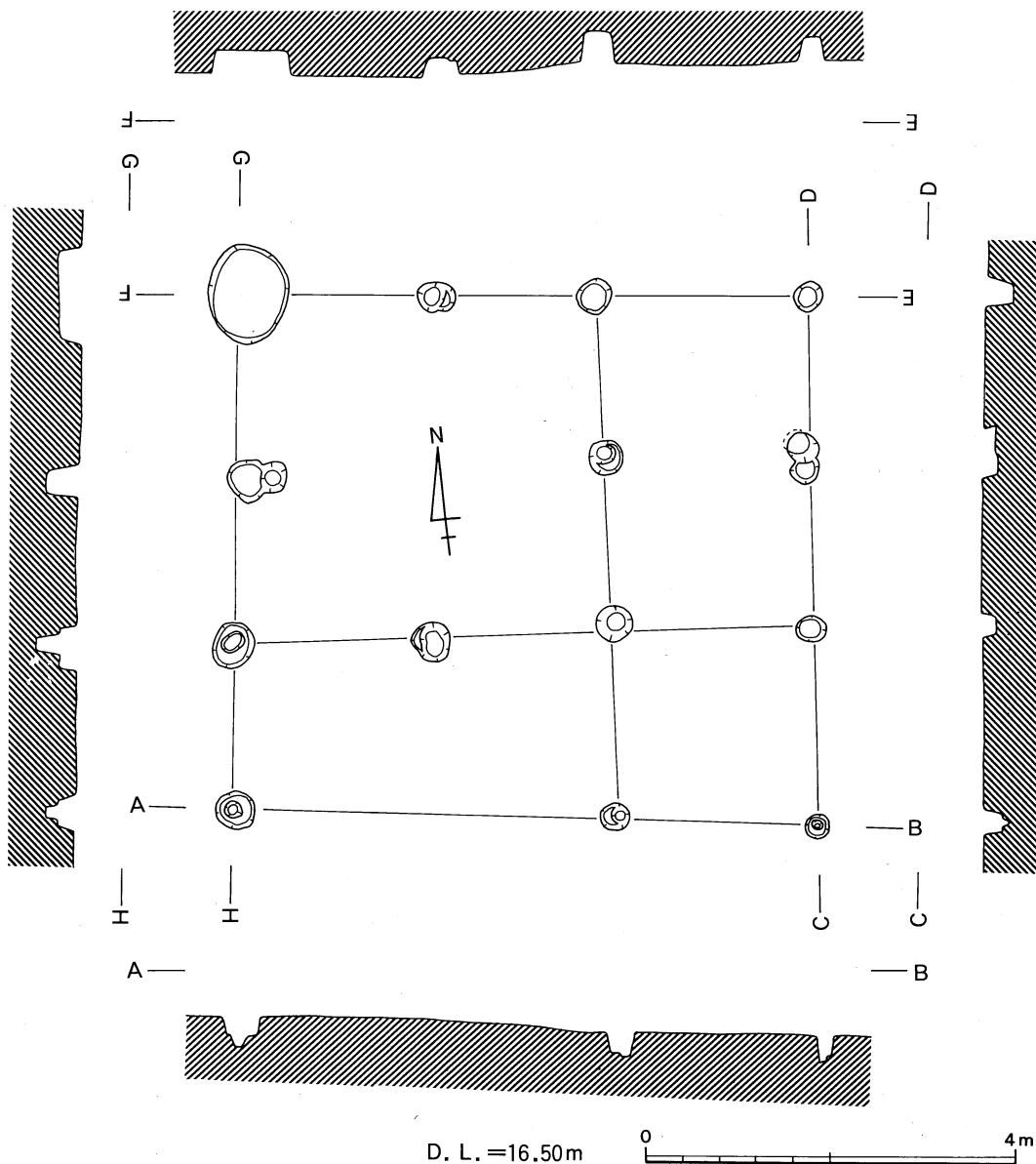
規模は3×3間であり、ほぼ正方形を呈する。南辺の柱穴が1個存在しないことからみれば東西棟と考えられ、棟方向はN-81°-Wである。梁間5.6m、桁行6.4mを測り、柱間距離は1.8mであるが、一部は2.2mと広い。

柱穴は、直径25~40cmの円形であり、5個に直径15~18cmの柱痕がみられる。深さは16~40cmを測り、重複する柱穴はほとんどみられない。埋土は暗茶褐色粘質土であり、出土遺物は土師質土器の細片であった。

# 土 壙

## S K 55 (第 5 図)

S K 55は、発掘区の北東端にかかり検出されており、南端はS D 40に接している。検出面はS T 18, S B 44と同じく第Ⅵ層上面である。



第11図 S B 48

発掘区にかかっているために全体の規模はつかめないが、深さ60cm前後を測る不定形の平面形をもつと考えられる。埋土は暗茶褐色粘質土であり、出土遺物には、須恵器及び土師質土器の細片が少量存在するが、この土壌の性格を示すものはみられない。

#### **S K 56 (第5図)**

S K 56は、発掘区の北部、西壁にかかり検出されており、S B 44の南 1.2mに位置する。検出面は、やはり第Ⅵ層上面である。

S K 55と同様に全体の規模は不明であるが、深さ約40cmを測り、検出部分からみれば楕円形に近い平面形をもつと考えられる。底面は平坦であり、埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物は少量の土師質土器片と須恵器の杯身45であり、外傾する低い高台をもつ。

#### **S K 57 (第5図)**

S K 57は、発掘区の中央部、西壁にかかり検出され、検出面は第Ⅳ層上面である。深さは30cmを測るが、平面形は不明であり、埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物は土師質土器片と格子目のタタキをもつ瓦であるが、瓦は中世の段階における混入である。

#### **S K 58 (第5図)**

S K 58は、発掘区中央部において検出されており、S B 45の北60mに位置している。検出面は第Ⅵ層上面であり、規模は長径84cm、短径68cm、深さ15cmを測る。平面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-7°-Wを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、出土遺物はわずかに土師質土器がみられる。

#### **S K 60 (第5図)**

S K 60は、発掘区中央部において検出されており、S K 58の南西40cmに位置している。検出面は第Ⅵ層上面であり、規模は長径1.28m、短径1.2mを測る正方形を呈している。長軸方向はN-87°-Wであり、深さは約10cmと浅く、底面は平坦である。埋土は暗茶褐色粘質土であり、出土遺物はほとんどみられなかった。

#### **S K 62 (第5図)**

S K 62は、発掘区の中央部において、S K 61の南に接して検出された。検出面は第Ⅵ層上面であり、規模は長径1.23m、短径0.96m、深さ約20cmを測り、長軸方向はN-86°-Wである。平面形は不整形であり、底面に直径10~20cmの小ピットが2個存在する。埋土は暗茶褐色粘質土であり、遺物は土師質土器片を若干出土した。

### S K 64 (第5図)

S K 64は、発掘区の南部において検出されており、S B 48の北 1.2mに位置している。検出面は、S B 48と同じく第Ⅳ層上面であり、中世の遺構検出面である。

規模は長径88cm、短径56cm、深さ18cmを測り、平面形は楕円形である。長軸方向はN-43°-Eであり、底面は平坦である。埋土は茶褐色粘質土であり、中央部には15~20cm大の自然石5個がみられ、その下からは土師質土器小皿7個と杯1個が出土した。このような遺物の出土状態からみれば、S K 64は中世の土壌墓と考えられる。

### 出土遺物 (第22図88~95)

88~94は回転糸切り底をもつ土師質土器小皿であり、非常に薄手である。95は同じく回転糸切り底の杯であり、直線的に開く。小皿、杯ともに赤褐色に発色しており、焼成は良好である。

### 溝

### S D 40・41 (第5図)

S D 40・41は、発掘区の北端部において検出された東西方向の溝であり、東端部でつながっている。検出面は第Ⅶ層上面であり、S D 41はS B 44の柱穴を切っている。

規模は、S D 40・41ともに幅90cm前後、深さ約40cmを測り、断面は緩やかなU字形を呈する。溝の方向はN-86°-Eであり、S B 44と同じく昭和59年度に検出されたS D 37に続くものである。埋土は暗褐色粘質土であり、出土遺物には、土師質土器片とともに須恵器、土師器が混入している。

### 出土遺物 (第22図97)

97はS D 41出土の須恵器の杯身であり、しっかりとした高台をもつ。胎土・焼成ともに良好であり、青灰色に発色する。S D 41はS B 44と重複しており、S B 44の遺物が混入したものと考えられる。

### その他の遺構

#### 集石墓

集石墓は、発掘区の北半部において検出されており、自然地形による不定形の落ち込みの上面に位置している。検出面は耕作土直下であり、第Ⅵ層上面から第Ⅱ・Ⅲ層中に集石がみられた。

集石は、東西に1.6m、南北に1.3mの規模をもち、10~20cmの円礫が多量に積まれていた。集石の下部には50cmほどの方形及び楕円形の自然礫8個を方形に配し、中央部に蔵骨器、外周部には土師質土器の小皿と杯がみられた。集石に伴う掘り込み等は確認されないで、第Ⅵ層上面に直接礫を配置した後、蔵骨器を埋納し、集石を行ったものである。また、配石の周辺部からは鉄釘が出土しており、蔵骨器または副葬品等を納める木製容器の存在が考えられる。

### 出土遺物 (第22図98～111)

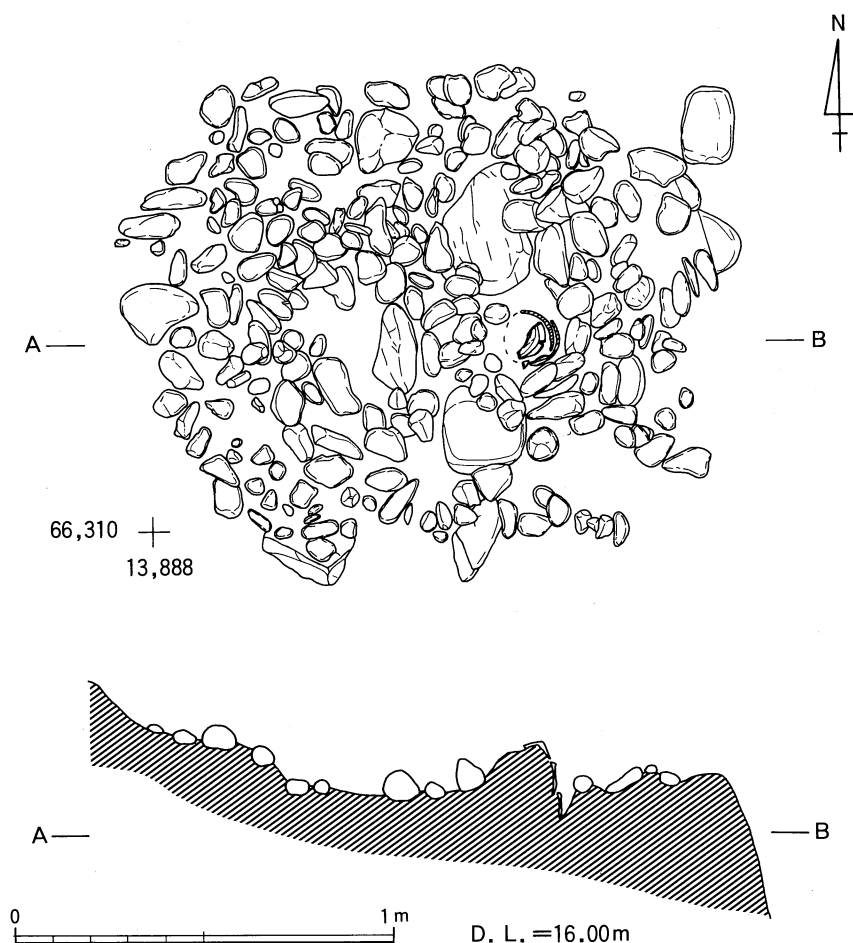
98～100は小皿, 101は杯であり, 底部回転糸切りである。102・103は土師質土器の蔵骨器である。102は蓋として使用されており, 底部回転糸切りである。103は, 一見植木鉢様の蔵骨器本体であり, 底部に板目を残し, 体部には粘土帯の接合痕を残すなど調整は粗く, 粗雑な作りである。104～111は鉄釘であり, 頭部とみられるものは先端が鎌型に曲げられており, 断面は方形である。また外面には横と縦方向の木目がみられる木質部が錆により付着している。

### 柱 穴

柱穴の多くは中世の所産になるものであり, 出土遺物も土師質土器を中心に中世の遺物が多くみられた。出土遺物を載せた柱穴は, P 1～22であり, いずれも中世である。

### 出土遺物 (第22図112・113, 第23図114～135)

112 (P 1) は直径1.5cmを測る土錘であり, 113 (P 2) は口縁下に鏝をもつ瓦質の鍋である。

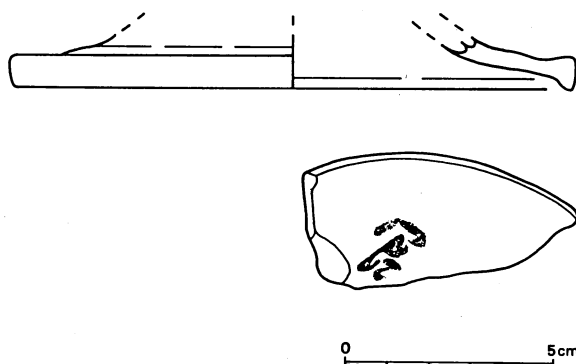


第12図 集石墓

方形のプランをもつP 3出土の114は須恵器杯身であり短い高台をもつ。115 (P 4) は高台を有する椀であり緩やかに開き、口縁部は小さく外反する。116 (P 5) は底部へラ切りの皿である。117 (P 6), 119 (P 8), 121 (P 10) は回転糸切りの底部をもつ杯であり, 118 (P 7) 120 (P 9) はへラ切りの底部をもつ杯である。122・123はともにP 11から出土した土師器の杯であり, 内外面にへラ磨きが施される。124 (P 12) はわずかに内湾する高台をもつ須恵器の杯身である。125 (P 13) は底部を欠くが, 口縁部は緩やかに開きわずかに外反する椀であり, 高台を有すると考えられる。126 (P 14) は回転糸切り, 127 (P 15) はへラ切りの底部をもつ杯である。128 (P 16) は土師質の捏鉢であり片口の一部が残されている。129 (P 17) は小皿, 130 (P 18), 131 (P 19) は杯でありいずれも回転糸切り底部で内面にロクロ目がみられる。132 (P 20), 133 (P 21) は砂岩製の砥石である。

134は120と同じくP 9から出土した須恵器の底部であり, 刻書土器である。刻まれている文字は「救道」であるが, その意味するところは不明である。今回までの土佐国衙跡発掘調査<sup>(註1)</sup>によって出土した墨書土器関連の遺物としては2点目であり, 他の1点は, 昭和54年度に実施された市道改良工事に伴う調査において出土しており, 土師器高杯脚部内面に「官」という文字が書かれた墨書土器であり, 官衙遺構群を裏付ける資料である。なお, 参考のために実測図, 写真を載せておく。135 (P 22) は石鍋の口縁部であり, 割口は研磨されていることから再利用されたものと考えられる。

註1 「救道」は救の異体字とみれば「救道」であり, 「すぐみち」と読めば, 発掘区の西を南北に走る市道が直道と呼ばれることから, 国衙のプランを構成するラインのひとつに関連する刻書ではないかと考えられる。



第13図 宮の西地区出土墨書土器



番 号	規 模 (梁間×桁行)(m)	柱間距離 (m)		棟 方 向	面 積 (㎡)	備 考
		梁 間	桁 行			
S B44	2 間×2 間以上 (1.8×1.8)	1.8	1.8	N-86°-E	(13.0)	昭和59年度検出のS B39と同一建物か？
S B45	2 間×2 間 (2.0×3.8)	1.2~1.6	1.8~2.0	N-10°-E	7.6	
S B46	1 間以上×3 間 (3.2×6.4)	1.2	1.8~2.4	N-8°-E	(20.5)	西へ延びる。
S B47	1 間以上×3 間 (2×6)	—	1.2×2.0	N-8°-E	(12.0)	〃
S B48	3 間×3 間 (5.6×6.4)	1.6~2.0	1.2~2.4	N-81°-W	(35.8)	中世

第2表 松ノ下地区掘立柱建物址計測表

番 号	平 面 形	規 模 (m)			長軸方向	備 考
		長 径	短 径	深 さ		
S K55	不 整 形	(1.92)	(1.76)	0.60	—	中世
S K56	橢 円 形	(1.63)	(1.12)	0.40	—	〃
S K57	—	(1.58)	(1.07)	0.30	—	〃
S K58	橢 円 形	0.84	0.68	0.15	N-7°-W	〃
S K59	方 形	2.20	2.00	0.90	N-83°-W	出土遺物多量。
S K60	〃	1.28	1.20	0.10	N-87°-W	中世
S K61	〃	1.85	1.78	0.72	N-18°-E	出土遺物多量。
S K62	〃	1.23	0.96	0.20	N-86°-W	中世
S K63	〃	2.03	1.92	1.05	N-8°-E	出土遺物多量。
S K64	橢 円 形	0.88	0.56	0.18	N-43°-E	中世墓

第3表 松ノ下地区土壌計測表

番 号	規 模 (m)			断 面 形	方 向	備 考
	幅	深 さ	検 出 長			
S D40	0.8	0.4	6.0	浅いU字形	N-81°-E	中世
S D41	0.9	0.4	6.0	〃	N-88°-E	〃
S D42	1.0	0.5	3.5	U字形	N-79°-W	〃
S D43	0.4	0.3	1.8	〃	N-11°-E	〃

第4表 松ノ下地区溝計測表

### Ⅲ 南屋敷地区

#### 1 調査方法と経過

調査対象地は、南国市比江字南屋敷 539番地であり、松ノ下地区から市道を隔て西へ80mの位置に所在する東西36m、南北32mを測る正方形に近い水田である。標高は16.2mを測る。南屋敷地区における調査の主たる目的は、国衙域の確認であり、官衙関連遺構群の西への広がりをつかむために試掘から開始された。発掘区は、対象地区を十字に区切るように幅4mのトレンチとして、まず設定した。そして、遺構の検出状況に応じて、随時拡張した。

調査は、耕作土除去について必要に応じ機械力を導入し、以下、包含層及び遺構検出面までは人力により掘り下げた。

試掘トレンチの調査結果によれば、北半部は耕作土直下に基盤の砂礫層がみられ、ピットが検出されたが、いずれも中世の所産であった。南半部では、砂礫層が急激に落ち込んでおり、茶褐色粘質土及び暗黒褐色粘質土の新たな土層の堆積がみられ、遺構の遺存状態も良好と考えられたので南半部を拡張し、遺構の検出に努めた。

調査の結果としては、古代の遺構として奈良時代の溝を1条検出した他は、すべて中世の遺構であり、土壇、溝、柱穴群が検出された。遺構の分布は、南半部が土層の堆積も厚く、遺構も削平の影響を受けず、よく残っていると思われたが、中世の柱穴群はむしろ中央部から北へかけて検出された。

調査期間は、測量も含め昭和61年11月12日から12月19日までの32日間であり、最終的な調査面積は414m<sup>2</sup>であった。

#### 2 調査の概要

南屋敷地区から検出された遺構は、土壇4基、溝2条、及び柱穴群である。出土遺跡は、約800点と松ノ下地区に比べても少なく、量的には大半が中世の土師質土器であった。

遺構は、中央部から北部に集中しており、南部では溝が1条検出されたのみであり、柱穴等はほとんどみられない。古代の遺構である中央部の溝は、南へと落ち込む地形にそって掘られており、その性格を知る上では重要な点である。他の中世遺構の中では北部において検出されたものは概して浅く、やはり削平等の影響を受けていると考えられる。

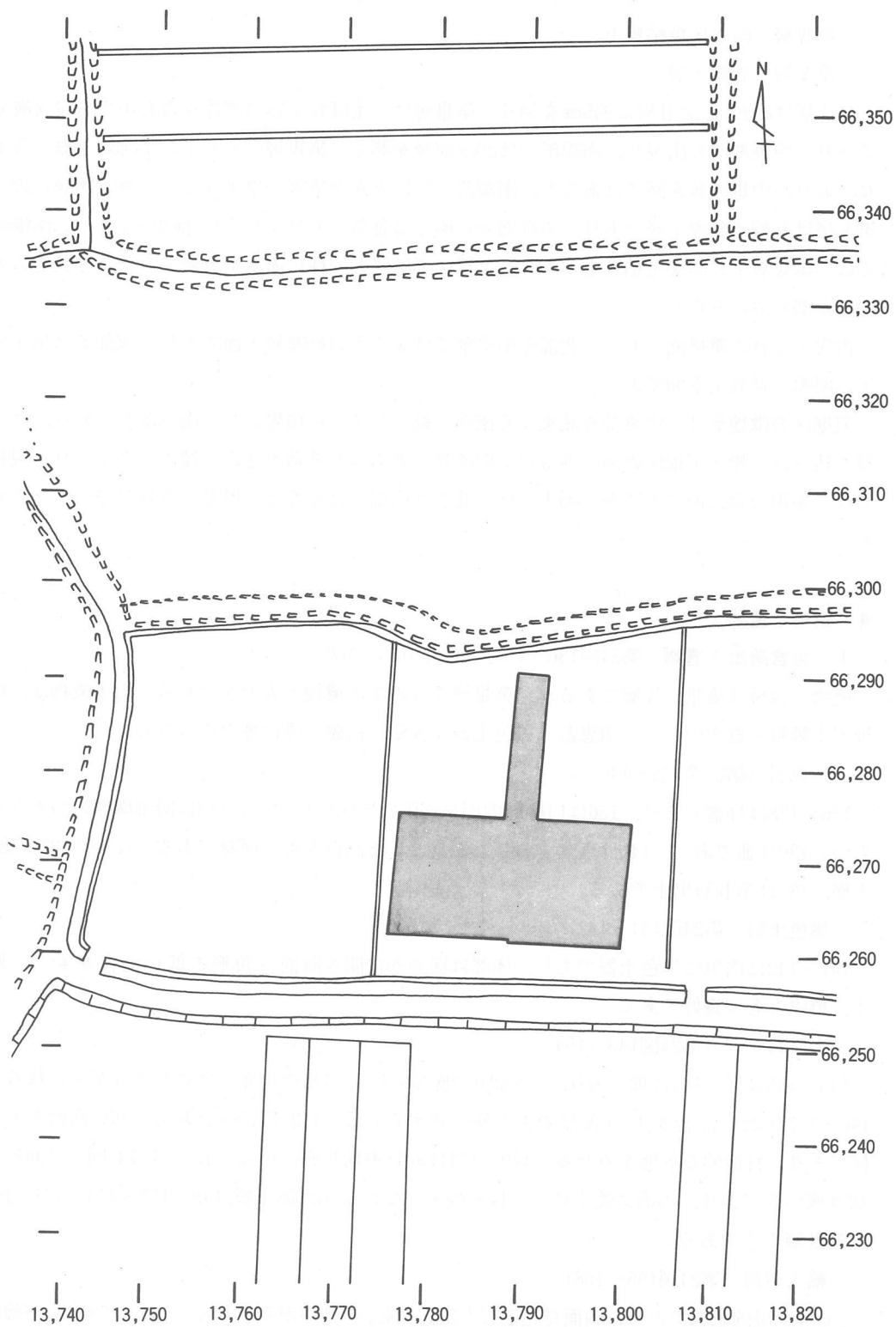
#### 3 層 序

南屋敷地区における基本層序は、次のとおりである。

第Ⅰ層 耕作土

第Ⅱ層 床土

第Ⅲ層 茶褐色粘質土



第14図 南屋敷地区発掘区設定図 (1/600)

#### 第Ⅳ層 暗黒褐色粘質土

#### 第Ⅴ層 砂礫土層

第Ⅰ層は約20cm, 第Ⅱ層は約5cmを測る。第Ⅲ層は、土師質土器の細片を含む中世の包含層であり、中央部から出現し、南端部では30cm前後を測る。第Ⅳ層にも若干の土師質土器が含まれており、中世の包含層ではあるが、南端部ではほとんど遺物の出土がなく、無遺物層に近い。第Ⅴ層は基盤の砂礫土層であり、中央部から南では急激に下がっており、検出されない。南端部では、第Ⅳ層下に明褐色粘質土がみられ、松ノ下地区と同様に赤ホヤと考えられる赤黄色の火山灰が部分的にみられる。

古代・中世の遺構面ともに、北部と中央部では床土下の砂礫層上面であり、南部では第Ⅳ層下の明褐色粘質土上面である。

発掘区の微地形は、中央部を北東から南西に結ぶラインを境界として南へ落ちており、この落ち込みは、松ノ下地区の南にみられる旧流路と考えられる落ち込みに続くものであり、現状では、平坦な水田面であるが、過去には、北部と南部にはかなりの段差が存在していたと思われる。

### 4 遺構と遺物

#### (1) 包含層出土遺物 (第24図136～158, 第25図159・160)

遺物包含層は第Ⅲ・Ⅳ層であるが、第Ⅲ層からの出土遺物が大半を占める。出土遺物は、中世の土師質土器を中心に、須恵器、黒色土器、青磁、白磁、染付等がみられる。

##### 須恵器 (第24図136～140)

136～138は杯蓋であり、136は口縁部内面に退化したかえりをもち、138は擬宝珠形のつまみをもつ。139は皿であり、140は直立するしっかりとした高台をもつ杯身である。なお、137は第Ⅰ層、139は第Ⅱ層出土である。

##### 黒色土器 (第24図141・142)

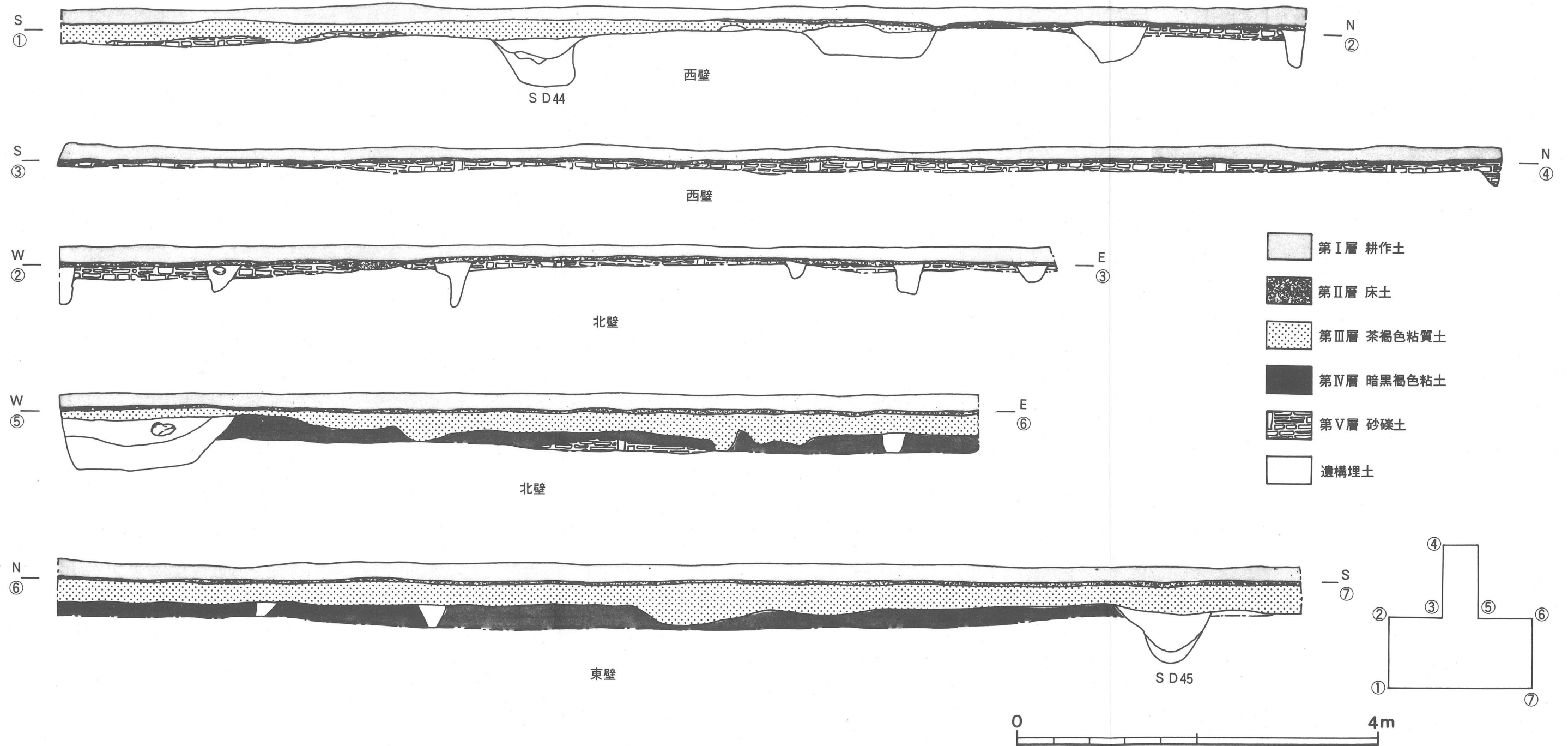
141・142は内黒の黒色土器であり、体部は緩やかに開き断面三角形の低い高台をもつ。胎土、焼成ともに良好である。

##### 土師質土器 (第24図143～154)

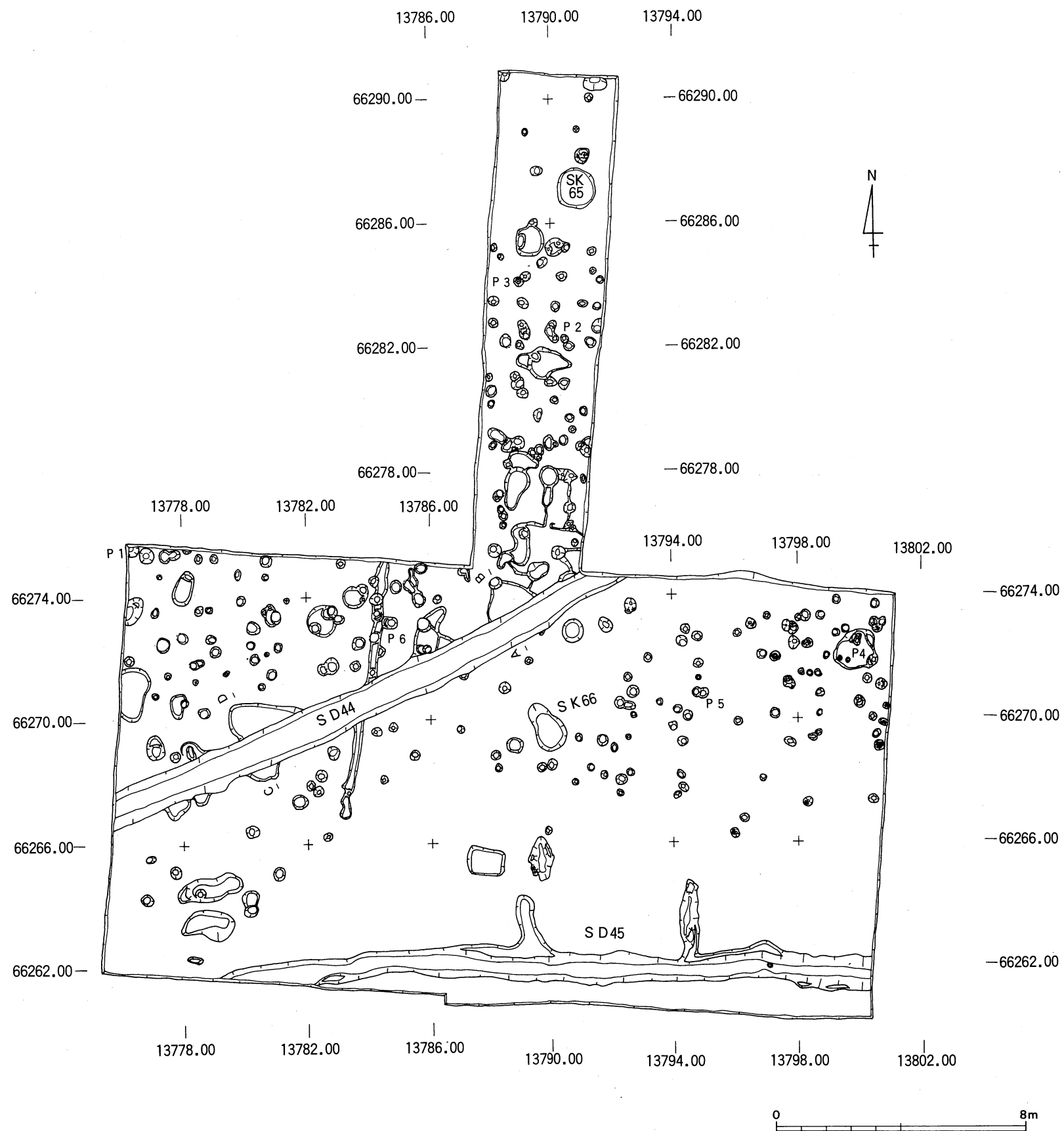
143・145は杯、144は皿であり、ヘラ切りの底部をもつ。145の内面にはロクロ目がみられる。146・147は低い高台をもつ底部であり碗と考えられる。148は1.5cmと非常に高い高台をもつ杯であり、特徴的な形態をみせる。149～151は回転糸切り底の小皿、152～154も同じく回転糸切り底の杯であり、内面に強くロクロ目を残す。なお、156は第Ⅰ層、148・152～154・157・158は第Ⅱ層出土である。

##### 輸入磁器 (第24図155～158)

155は青磁碗底部であり、内面見込みに「金玉満堂」の押印がみられる。156～158は白磁碗の



第15図 南屋敷地区発掘区セクション図D.L.=16.00m



第16図 南屋敷地区遺構平面 全体図 (1/160)

口縁部であり、いずれも玉縁の口縁をもつ。159・160は染付であり、159は外面に葡萄唐草文、内面にも唐草文と思われる文様がみられる。160の外面には唐草文、内面には羯磨文がみられる。

## (2) 古 代

古代の遺構としては、溝を1条検出した。

### 溝

#### S D 44 (第16・17図)

S D 44は、発掘区の中央部を北東から南西へと横走りする溝である。検出面は第Ⅴ層上面であり、第Ⅱ層床土下においてプランを確認した。

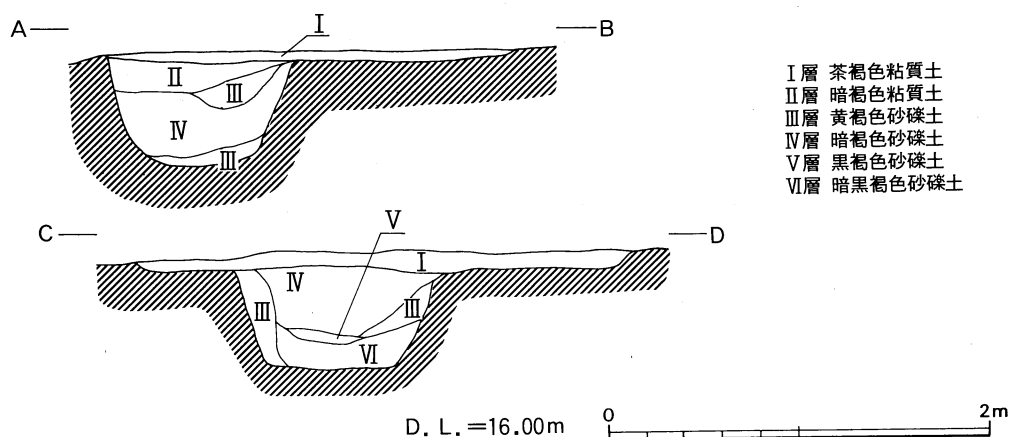
規模は、幅1.2m、深さ60cmを測り、検出長は16.8mである。S D 44の方向はN-65°-Eであり、一直線に延びる。断面形は箱形であり、壁はほぼ垂直、底面は標高15.30m前後を測り、ほぼ水平である。

埋土は、砂礫層を掘り込んでいることから、暗褐色から暗黒褐色を呈する砂礫土であり、非常に堅くしまっている。上部には薄く粘質土もみわれるが、中世における削平、攪乱の影響である。遺物は、埋土中に散在し出土しており、底部直上出土の遺物はないが、頸部を欠く須恵器の長頸壺が、底面から10cmほど上面で出土している。

埋土、遺物の出土状態からみると、S D 44は短期間に使用された後に、一気に埋められたものと考えられる。また、S D 44の南1mほどの位置から南へと地形は下がっており、S D 44はこの地形にそって掘られたものである。

#### 出土遺物 (第25図163~165)

163は土師器の甕であり、やや内湾しつつ立上る。外面は口縁部から上胴部にかけて、横方向



第17図 S D 44セクション図

のハケ目、下胴部には縦方向のハケ目が施される。164・165は須恵器である。164は長頸壺の体部であり、頸部欠損を除けば完形である。165は広口壺の口縁部であり、ハケ状工具による押圧文がみられる。

### (3) 中 世

中世の遺構は、土壇15基、溝1条及び柱穴群である。土壇は、土師質土器の細片等を出土しているが性格は不明である。遺物の実測図を載せたものに説明を加える。溝は、全体の遺構配置からみれば、柱穴群を囲む屋敷を形成する溝と考えられる。

#### 土 壇

##### S K 65 (第16図)

S K 65は、北試掘トレンチの北部で検出された。検出面は第V層上面である。

規模は、直径1.2mを測る円形であり、深さは約20cmを測る。底面は平坦であり、埋土は暗褐色砂礫土である。

##### 出土遺物 (第25図161)

161は、回転糸切りの底部をもつ土師質土器杯である。内面にロクロ目がみられる。

##### S K 66 (第16図)

S K 66は、発掘区の中央部において検出されており、S D 44の南2mに位置する。検出面はやはり第V層上面である。

規模は、長径1.6m、短径1.1mを測る不定楕円形であり、深さは40cmを測る。長軸方向はN-29°-Wであり、底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。

##### 出土遺物 (第25図162)

162は、土師質土器の鍋であり、やや開く口縁部をもつ。内面には口縁部成形時の接合痕がみられ、外面には煤の付着がみられる。

#### 溝

##### S D 45 (第16図)

S D 45は、発掘区の南壁にそって検出されており、西端部はやや曲り発掘区外へと延びている。検出面は第IV層上面である。

規模は、幅0.8~1.3m、深さ0.4~1.1mを測り、東端部が最も深く西方へと徐々に浅くなっている。検出長は21.2mを測り、断面形は緩やかなU字形を呈する。溝の方向はN-89°-Eと北に対してほぼ直交している。また、S D 45からは北へ向け、2.56mと1.6mの2本の小溝が延びている。埋土は暗褐色粘質土であり、東端部では下部に暗灰色粘質土が堆積している。出土遺物は、埋土中に散在していたが、北へ延びる小溝からは集中して出土している。



### 出土遺物（第26図166～170）

166～170は土師質土器であり、166は底部回転糸切り、内面にロクロ目を残す小皿である。167は1.8cmほどの高い高台をもつ小皿である。168・169は高台をもち緩やかに開く椀であり、169は高台脇に部分的な粗いヘラナデがみられる。170は口縁下に鏝をもつ鍋であり、胎土、焼成ともに良好である。

### その他の遺構

#### 柱 穴

柱穴は中央部から北にかけて検出されているが、すべて中世の所産であり、土師質土器を中心とした遺物が出土した。出土遺物を掲載した柱穴は、P 1～6の6個である。

### 出土遺物（第26図171～183）

171～175はP 1からの一括出土である。回転糸切り底部をもち、内面にロクロ目を強く残す土師質土器杯であり、器形、法量ともにきわめて同一性を示す。176（P 2）は染付の口縁部であり、外面に唐草文の一部がみられる。177（P 3）は瓦質土器の鍋であり、口縁部は内湾し終り、外面に口縁部の形成痕がみられる。178（P 4）は土師質土器杯であり、直線的に開く口縁部の外面にはロクロ目が残される。179（P 5）は須恵器の甕底部であり、土師質土器とともに出土するところから混入と考えられる。180～182は底部ヘラ切りの小皿であり、P 6からの一括出土である。183はP1出土の北宋銭「祥符通宝」であり、杯の一括出土とともに注目される。

番 号	規 模 (m)			断 面 形	方 向	備 考
	幅	深 さ	検出長			
S D44	1.2	0.6	16.8	箱 形	N-65°-E	古代
S D45	1.3	1.1	21.2	U 字 形	N-89°-E	中世

第5表 南屋敷地区溝計測表

番 号	平 面 形	規 模 (m)			長軸方向	備 考
		長 径	短 径	深		
S K65	円 形	1.2	—	0.2	—	中世
S K66	楕 円 形	1.6	1.1	0.4	N-29°-W	〃

第6表 南屋敷地区土壌計測表

## IV 総 括

今回の調査は、松ノ下地区、南屋敷地区の2地区が対象地であり、松ノ下地区は金屋ヤシキ、南屋敷地区はアズキ田と呼ばれる水田である。松ノ下地区については、昭和59年度に引続き実施された2回目の調査であり、南屋敷地区は、従来の調査対象地に比べ西方へ設定された国衙域確認のための調査区であった。<sup>(註1)</sup>

調査の結果としては、松ノ下、南屋敷の両調査区ともに、政庁の位置、国衙のプラン等を確認できる遺構の検出には至らなかった。しかし、松ノ下地区では、新たな掘立柱建物址3棟と一昨年度に検出された建物につながる掘立柱建物址1棟を検出した。南屋敷地区においても、奈良時代の良好な溝を検出しており、今後その追求によっては国衙域のプランをつかむことができるのではないかと考えられ、土佐国府跡の調査を進めていく上で、新たな資料を得ることができた。以下に両地区の遺構と遺物に若干の考察を加え、まとめてみたい。

### 松ノ下地区

松ノ下地区では、S B 44～47の4棟の掘立柱建物址が検出された。S B 44は2×3間以上の規模をもつ東西棟であり、柱穴の規模、建物の位置、棟方向からみれば、昭和59年度に東隣りの水田で検出されたS B 39と同一建物と考えられ、その西半部であろう。全体の規模は、梁間3.6m、桁行18mを測る2×10間と非常に細長い東西棟と推定され、今までの調査ではみられなかった規模をもつ建物である。このように長い建物は、やはり一般的な用途のために建てられたものではなく、官衙に関連する建物としてとらえることができる。国衙の構造を直接的に示唆する資料ではないが、政庁周辺に位置する建物と考えれば、今回までの調査結果を加味することにより、松ノ下地区の北部に政庁の位置を想定することができよう。<sup>(註2)</sup>

S B 45は2×2間、S B 46・47は3×1～2間以上の規模をもつが、その性格等については不明であり、現段階ではやはり周辺官衙を構成する建物群の一部と言わざるをえない。しかしS B 47は、柱穴の規模も大きくしっかりしており、一昨年度の調査で注目されたS B 43と何んらかのつながりをもつ可能性がある。また、S B 46とS B 47は延長線上に約2mの間隔をおいて南北に並んでおり、今後の検討の結果によれば同一の建物としてとらえられるかもしれない。なお、一昨年度に検出されたS B 42・43は、今回の調査区にはかかっておらず、梁間は3～4間を上限とするものと考えられる。

これらの建物の柱穴からは、須恵器、土師器の細片が出土しているが、実測可能なものはなく、図示できなかった。その結果、出土遺物からは、建物の時期を確実につかむことはできないが古代の建物であることは認められ、その時期については、柱穴の規模、棟方向、S B 39との関連性から8世紀中葉から9世紀前半と考えられる。

土壌では、S K 59・61・63の3基が注目される。3基ともに1辺2m前後を測り、方形を呈する土壌であり、深さは1m前後と非常に深い。埋土は暗褐色粘質土を含む砂礫土であり、堅く

しまっており、一気に埋められたとみられる。遺物の出土量は多く、混入である古墳時代の須恵器等を除けば、ヘラ切りの底部をもつ皿、杯が量的に多く、一括出土といえる。ヘラ切り底部をもつ土器は、従来の調査でも出土しているが、今回は土壌に伴う一括資料として良好なものである。時期的には、混入と考えられるものも多く、時期を決定付ける遺物の共伴がないので断定することはできないが、平安時代後半に位置付けることができると考えており、場合によっては鎌倉時代にも入る可能性がある。土壌の性格を示す遺物は発見されなかったが、規模、配置などからみれば、穴倉として使用されたものではないかと推測される。

### 南屋敷地区

南屋敷地区で注目されるのは、やはりS D44である。従来の調査でも古代の溝は発見されているが、いずれも規模が小さく性格の不明瞭なものであった。これに対してS D44は、幅1.2m、深さ0.6m、検出長も16.8mを測り、規模が大きく断面形も箱形を呈しており、しっかりしている。埋土は暗褐色砂礫土で堅くしまっており、やはり短期間に使用された後に埋められたものと考えられる。時期的には、出土遺物からみて8世紀中葉から後半であり、官衙に關係する溝と推定される。しかしその方向はN-65°-Eと、北東から南東へ一直線に延びており、政庁あるいは国衙を画する溝とは言えず、検出された微地形からみれば傾斜地にそって掘られており、官衙域を画する溝から派生する排水溝的なものではないかと考えられる。この結果からみれば、溝の延びる北東方向の延長線上に政庁の位置も推定され、松ノ下地区で述べたように松ノ下地区の北半部から東の金屋地区が有望と考えられる。

以上のように、政庁の位置、国衙のプラン等を明確にする遺構は発見されなかったが、2×10間と長い建物の存在、また、奈良時代の溝の確認等、新たな資料の蓄積により、政庁の確認及び土佐国府跡の構造解明に一歩近づくことができ得たものと考ええる。

註1 高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第3集—府中地区の調査—昭和57年3月

註2 高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第6集—ノ坪・鍛冶給・松ノ下地区の調査—昭和61年3月

第7表 出土遺物計測表 1

番号	器 種	出土層位 出土遺構	法 量 (cm)			特 徴
			口 径	器 高	底 径	
1	杯 蓋	第Ⅲ層	12.8	( 3.8)	—	天井部は丸く、きほどをへら削り。
2	〃	〃	12.2	( 3.6)	—	〃
3	〃	〃	12.4	( 3.6)	—	天井部きほどをへら削り。
4	杯 身	〃	13.6	( 3.5)	—	底部は丸味をおび、きほどをへら削り。 受部の立上りは低く、内傾する。
5	〃	〃	12.4	3.1	—	底部は平坦であり、不明瞭なへら削り。 受部の立上りは低い。
6	杯 蓋	〃	—	( 1.8)	—	擬宝珠形のつまみをもつ。
7	〃	〃	—	( 1.6)	—	〃
8	杯	〃	12.9	3.5	8.0	やや内傾気味の高台をもち、口縁部はわずかに外反する。へら記号が一部みられる。
9	〃	〃	—	( 1.8)	9.4	底部へら切りに、底面が凹む低い高台をもつ。
10	〃	〃	—	( 1.4)	6.3	底部回転糸切りに、底面が凹みややや外傾する低い高台をもつ。
11	〃	〃	—	( 1.9)	9.4	底部へら切りに、低い高台をもつ。
12	〃	〃	—	( 1.5)	10.8	やや外傾する高台をもつ。
13	〃	〃	—	( 1.9)	8.4	底部へら切りに、低い高台をもつ。
14	〃	〃	—	( 1.6)	11.0	やや大きな底部に、低く外傾する高台をもつ。
15	〃	〃	—	( 1.6)	12.2	やや大きな底部に、丸味をおびた高台をもつ。
16	皿	〃	15.0	2.2	12.2	口縁部は外上方に開き、薄く終る。
17	〃	〃	16.6	3.0	10.6	口縁部は緩やかに内湾し立上る。
18	杯 蓋	第Ⅳ層	15.0	2.5	—	擬宝珠形のつまみをもち、口縁部はやや下方へ屈曲し終る。ほぼ完形であり、焼きゆがみがみられる。
19	杯 身	〃	—	( 2.2)	10.5	やや外傾する高台をもつ。
20	杯	第Ⅲ層	13.9	3.4	8.6	口縁部は直線的に開き、端部内面はヨコナデによりわずかに内湾する。内面にはへら磨きが施される。
21	皿	〃	16.8	1.5	13.2	口縁部は外反気味に開き、端部は小さく内湾する。内面にへら磨きが施されるが、磨耗する。

第7表 出土遺物計測表2

番号	器 種	出土層位 出土遺構	法 量 (cm)			特 徴
			口 径	器 高	底 径	
22	甕	第Ⅳ層	26.8	( 3.8)	—	口縁部は緩やかに外反し，端部はやや上方へ肥厚し，丸く終る。
23	〃	第Ⅲ層	34.6	( 6.1)	—	口縁部はやや屈曲し，内湾気味に開く。 体部外面に煤の付着がみられる。
24	〃	第Ⅳ層	—	( 4.8)	13.6	平底の底部であり，直線的に立上る。 底部脇外面にヘラ削りがみられる。
25	碗	第Ⅲ層	—	( 2.7)	( 8.6)	内黒の黒色土器であり，外面にはロクロ目がみられる。 高台は剝離している。
26	〃	〃	—	( 2.8)	8.4	内黒の黒色土器であり，断面三角形の低い高台をもつ。
27	小 皿	第Ⅳ層	8.3	1.6	6.8	口縁部は小さく立上り，内面にロクロ目がみられる。 底部ヘラ切りであるが磨耗する。
28	〃	第Ⅲ層	9.8	1.7	8.0	口縁部は緩やかに湾曲し立上り，内面にロクロ目がみられる。 底部はヘラ切り。
29	杯	〃	10.8	3.8	7.2	体部は直線的に開き，口縁部はわずかに外反する。内面にロクロ目を残し，底部はヘラ切り。
30	〃	第Ⅳ層	—	( 2.4)	6.8	体部は内湾気味に立上り，内面にロクロ目がみられる。 底部はヘラ切り。
31	碗	第Ⅲ層	—	( 2.4)	7.8	やや外傾する丸味をおびた高台をもち，緩やかに立上る。
32	〃	〃	16.7	5.3	6.4	底部は高台状の回転糸切り。体部は緩やかに内湾し立上る。 口縁部は小さく外反する。内面にロクロ目を残す。
33	〃	〃	15.8	( 4.2)	—	緩やかに立上り，口縁部は直線的に開く。
34	〃	〃	—	( 2.1)	5.8	底部は高台状の回転糸切り。
35	〃	〃	—	( 2.4)	6.2	底部は高台状の静止糸切り。
36	杯	第Ⅳ層	13.6	3.3	8.4	体部は強く屈曲し立上り，わずかに外反する。 全体に磨耗している。
37	皿	第Ⅲ層	14.9	2.8	9.2	内外面に指頭圧痕を残し，口縁部はヨコナデ。
38	小 杯	〃	7.2	1.8	5.2	体部は直線的に開き，底部は回転糸切り。内面にロクロ目がみられ，内外面に煤が付着する。
39	〃	〃	7.1	2.1	5.0	体部は内湾気味に開き，底部は回転糸切り。
40	皿	〃	9.2	1.5	6.4	体部は外反気味に大きく開き，底部は回転糸切り。
41	青 磁	〃	16.6	( 5.0)	—	口縁部であり，外面に鎗蓮弁がみられる。 青緑色の施釉。
42	〃	第Ⅰ層	—	( 2.7)	4.4	底部であり，外面に細蓮弁がみられ，高台内を除き全面薄緑色の施釉。内面見込みには印花文。

第7表 出土遺物計測表 3

番号	器 種	出土層位 出土遺構	法 量 (cm)			特 徴
			口 径	器 高	底 径	
43	白 磁	第Ⅲ層	—	( 3.3)	6.4	底部であり、やや低い削出し高台をもつ。
44	天目茶碗	第Ⅰ層	11.8	( 3.7)	—	口縁部であり、茶褐色の鉄釉。
45	杯	S K 56	—	( 1.3)	11.4	外方へ屈曲する高台をもち、灰白色を呈す。
46	碗	S K 59	16.6	( 4.4)	—	内黒の黒色土器であり、胎土、焼成ともに良好。
47	杯	〃	12.6	3.4	7.6	ヘラ切りの底部をもち、体部は緩やかに立上る。 口縁部はわずかに外反する。
48	〃	〃	12.7	2.9	6.4	ヘラ切りの底部をもち、体部は内湾気味に立上る。 内面見込みにロクロ目を残す。
49	〃	〃	12.6	( 3.1)	—	底部を欠き、口縁部は緩やかに開き、わずかに外反する。
50	〃	〃	12.2	4.9	7.5	ヘラ切りの底部をもち、体部は直線的に開く。 外面及び内面見込みにロクロ目を残す。
51	碗	〃	16.0	( 2.7)	—	緩やかに開き、口縁部はわずかに外反する。
52	杯	〃	—	2.5	7.5	非常に高く、やや外反する高台をもつ。
53	土 錘	〃	全長 3.9	全幅 1.2	重量(g) 5	やや小型である。
54	杯	S K 60	—	1.8	8.0	ヘラ切りの底部をもち、内面にロクロ目を残す。
55	杯	S K 61	—	( 1.7)	10.4	底面がやや凹む高台をもつ。
56	皿	〃	11.6	1.75	8.0	ヘラ切りの底部をもち、内面にロクロ目を残す。 口縁部は大きく開く。
57	〃	〃	11.4	1.5	8.4	〃
58	〃	〃	13.6	1.9	9.4	〃
59	〃	〃	12.4	1.9	8.0	〃
60	〃	〃	12.2	2.3	5.6	やや器高が高く、口縁部はわずかに外反する。
61	杯	〃	11.4	( 3.1)	6	ヘラ切りの底部をもち、内面にロクロ目を残す。 体部は直線的に開く。
62	〃	〃	10.7	( 3.4)	—	底部はやや丸味をもつ。
63	〃	〃	11.0	2.8	3.8	〃

第7表 出土遺物計測表 4

番号	器 種	出土層位 出土遺構	法 量 (cm)			特 徴
			口 径	器 高	底 径	
64	杯	S K 61	12.7	2.95	6.8	ヘラ切りの底部をもち、内面にロクロ目を残す。 口縁部はやや外反す。
65	〃	〃	13.0	2.7	—	〃 〃
66	〃	〃	11.8	3.6	6.0	〃 やや器高が高い。
67	〃	〃	13.0	2.9	—	底部を欠き、体部は直線的に開く。 外面にロクロ目を残す。
68	〃	〃	11.8	3.6	8.2	ヘラ切りの底部をもち、内面にロクロ目を残す。 底部は丸味をおび、なめらかに立上る。
69	〃	〃	—	( 1.7)	8.6	ヘラ切りの底部をもつ。
70	土 錘	〃	全長 4.9	全幅 1.9	重量(g) 13.0	やや大型である。
71	鉄 鏃	〃	〃 7	〃 2.8	〃 22.1	水平な先端部をもつ鉄鏃である。
72	杯	S K 63	12.4	3.4	6.3	天井部にヘラ削りが施され、口縁部内面にナデによる 小段がみられる。
73	碗	〃	—	( 1.9)	7.3	内黒の黒色土器であり、断面台形の小さな高台をもつ。
74	〃	〃	—	( 1.8)	8.4	内黒の黒色土器であり、断面三角形の小さな高台をも つ。
75	皿	〃	11.6	1.8	7.8	ヘラ切りの底部をもち、口縁部は大きく開く。
76	〃	〃	10.2	2.3	4.9	ヘラ切りの底部をもち、内面にロクロ目を残す。 口縁部は大きく開く。
77	杯	〃	11.4	2.5	6.4	ヘラ切りの底部をもち、体部は直線的に開く。
78	〃	〃	11.6	3.3	6.0	丸味をおびたヘラ切りの底部をもち、内面にロクロ目 を残す。口縁部はやや外反する。
79	〃	〃	13.2	3.0	8.0	ヘラ切りの底部をもち、体部は緩やかに開く。
80	〃	〃	12.9	3.1	6.4	ヘラ切りの底部をもち、内面にロクロ目を残す。 口縁部はやや外反する。
81	〃	〃	11.8	4.3	6.5	ヘラ切りの底部をもち、内外面にロクロ目を残す。 体部は直線的に開く。
82	甕	〃	42.0	(10.2)	—	直立する口縁下部に断面三角形の小さな鏝が貼付され る。外面には細いハケ目が施される。
83	〃	〃	30.4	11.0	—	直立する胴部から大きく開き、口縁端部は上方に肥厚 する。外面に細いハケ目と下部にタタキ目がみられる。
84	砥 石	〃	全長 19.0	全幅 15.0	重量(g) 2,000	砂岩製であり、4面を使用する。

第7表 出土遺物計測表 5

番号	器 種	出土層位 出土遺構	法 量 (cm)			特 徴
			口 径	器 高	底 径	
85	砥 石	S K 63	全長 20.0	全幅 10.1	重量(g) 2,060	砂岩製であり、1面を使用する。
86	鉄 釘	〃	〃 9.5	〃 0.8	〃 11.7	鉄釘であり、上下端を欠く。
87	〃	〃	〃 12.3	〃 2.6	〃 26.0	鉄釘であり、折り曲げた頭部をもつ。
88	小 皿	S K 64	8.8	1.2	5.4	回転糸切り底をもち、口縁部は大きく開く。
89	〃	〃	9.0	1.4	5.9	〃
90	〃	〃	9.3	1.3	6.4	〃
91	〃	〃	8.6	1.2	5.6	〃
92	〃	〃	9.0	1.5	5.3	〃
93	〃	〃	8.8	1.5	5.2	外面にロクロ目を残す。
94	〃	〃	9.4	1.6	5.2	〃
95	杯	〃	14.2	4.9	7.3	回転糸切り底をもち、体部は直線的に開く。
96	〃	S T 18	13.6	3.7	5.0	底部にヘラ削りが施され、受部は短く、内傾気味に立上る。
97	〃	S D 40	—	3.2	8.4	直立する高台をもち、青灰色に発色する。
98	小 皿	集 石 墓	7.3	1.5	4.9	回転糸切り底をもち、口縁部は外上方に開く。
99	〃	〃	7.4	1.3	5.6	〃
100	〃	〃	7.2	1.5	5.4	〃
101	杯	〃	11.0	4.0	6.0	回転糸切り底をもち、体部は直線的に開く。 外面にロクロ目を残す。
102	〃	〃	16.1	5.9	7.8	回転糸切り底をもち、緩やかに内湾し開く。外面及び内面見込みにロクロ目を残す。
103	蔵 骨 器	〃	14.2	17.4	12.6	直立する体部から口縁部はヨコナデにより小さく外反する。内外面に粘土帯の接合痕を残し、上半部にナデ底部は板目を残す。
104	鉄 釘	〃	全長 6.5	全幅 1.1	重量(g) 8.6	木質が付着する。
105	〃	〃	〃 7.5	〃 1.2	〃 5.7	〃 ほぼ完形。



第7表 出土遺物計測表 6

番号	器 種	出土層位 出土遺跡	法 量 (cm)			特 徴
			口 径	器 高	底 径	
106	鉄 釘	集 石 墓	全長 3.7	全幅 1.0	重量(g) 2.9	木質が付着する。
107	〃	〃	〃 5.4	〃 0.8	〃 3.3	〃
108	〃	〃	〃 7.6	〃 1.0	〃 7.7	〃
109	〃	〃	〃 5.3	〃 1.0	〃 4.5	下部を欠く。
110	〃	〃	〃 5.5	〃 1.6	〃 4.3	木質が付着する。
111	〃	〃	〃 5.6	〃 1.0	〃 4.9	〃
112	土 錘	P 1	〃 4.9	〃 1.5	〃 6.8	やや小型である。
113	鍋	P 2	20.4	4.1	—	わずかに内傾する口縁部に鏝をもつ。
114	杯	P 3	—	4.0	10.4	小さな高台をもつ底部から強く屈曲し立上る。
115	碗	P 4	15.7	5.0	6.9	回転糸切り底に高台を貼付する。体部は緩やかに立上り、口縁部は外反する。やや磨耗する。
116	皿	P 5	13.6	1.8	7.0	ヘラ切りの底部をもち、口縁部は緩やかに立上る。内面にロクロ目を残す。
117	杯	P 6	—	( 1.8)	6.4	回転糸切りの底部をもつ。
118	〃	P 7	11.4	( 3.4)	—	内湾気味の体部をもち、口縁部は直線的に開く。
119	〃	P 8	12.8	( 2.6)	—	内面にロクロ目を残す。胎土、焼成良好。
120	〃	P 9	—	( 1.8)	6.6	ヘラ切りの底部をもち、体部は直線的に立上る。
121	〃	P10	—	( 2.6)	6.2	回転糸切りの底部であり、外面にロクロ目を残す。
122	〃	P11	14.2	( 3.1)	—	緩やかに開く口縁部であり、内外面に弱いヘラ磨きが施される。
123	〃	〃	—	( 1.7)	7.8	底部であり、内外面にヘラ磨きが施される。
124	〃	P12	—	( 1.3)	7.8	やや内傾する高台をもつ。
125	〃	P13	13.4	( 3.8)	—	緩やかに内湾する体部から口縁部はやや外反する。外面にロクロ目を残す。
126	〃	P14	13.9	3.4	6.6	回転糸切り底をもち、体部は直線的に開く。磨耗する。

第7表 出土遺物計測表7

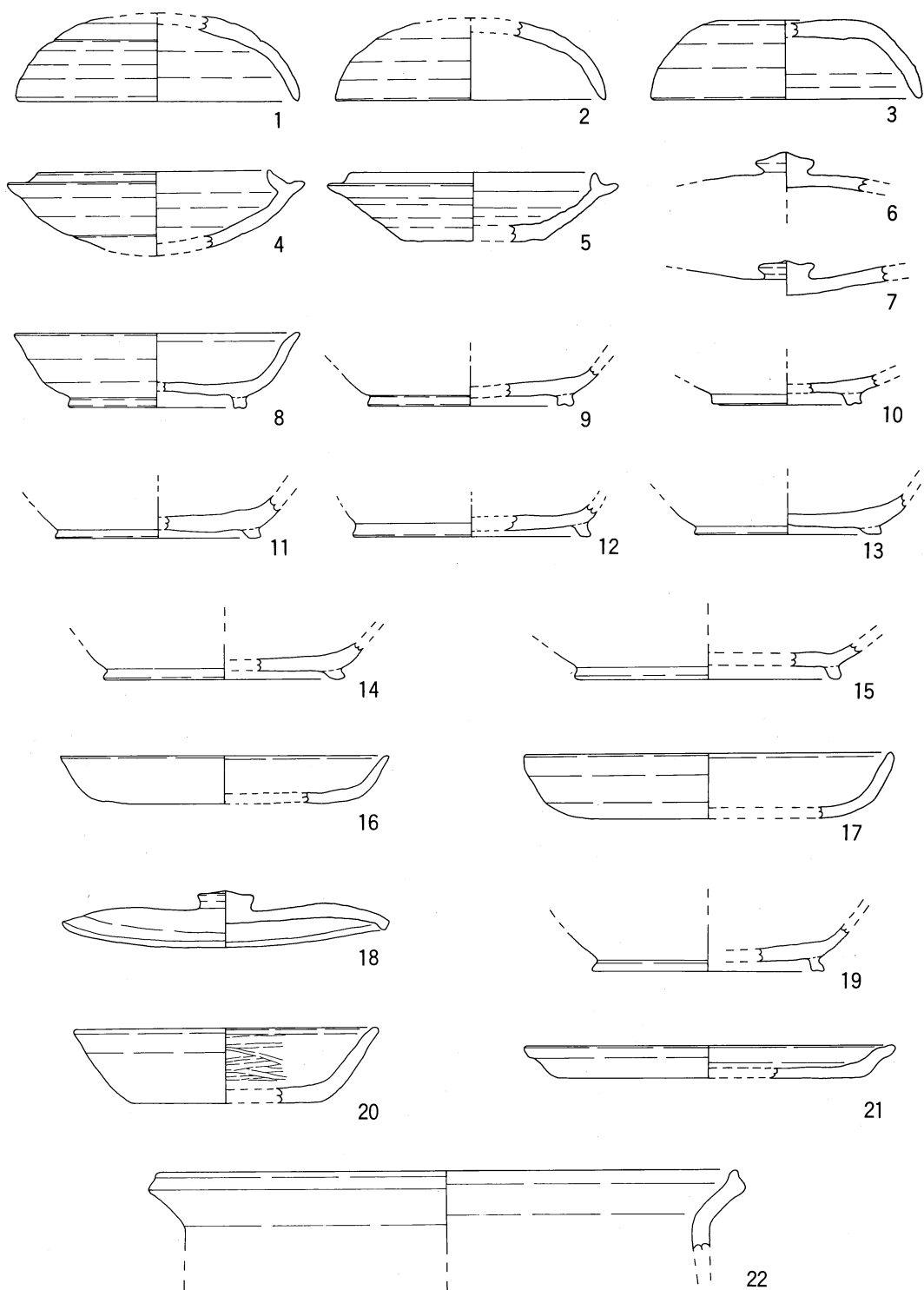
番号	器 種	出土層位 出土遺構	法 量 (cm)			特 徴
			口 径	器 高	底 径	
127	杯	P15	—	( 1.7)	9.0	ヘラ切りの底部である。
128	鉢	P16	25.0	( 7.6)	—	やや内湾し開く体部をもち、口縁部は肥厚し、丸味をおびた端部をもつ。片口の一部がみられる。
129	皿	P17	8.9	1.7	5.1	回転糸切りの底部をもち、口縁部は外反する。内面にロクロ目を残す。
130	杯	P18	14.4	4.3	7.7	回転糸切りの底部をもち、体部は直線的に開く。外面にロクロ目を残す。
131	〃	P19	14.3	3.8	8.0	内外面にロクロ目を残す。
132	砥 石	P20	全長 18.8	全幅 15.2	重量(g) 4,500	砂岩製であり、2面を使用する。
133	〃	P21	〃 13.4	〃 5.5	〃 470	〃
134	杯	P 9	—	( 0.6)	8.6	外底面に刻書がみられる。
135	石 鍋	P22	全長 5.2	全厚 1.3	重量(g) 69.0	口縁部であり、割口を研磨しており、砥石として再利用か。
136	杯 蓋	第Ⅲ層	16.2	( 1.7)	—	口縁部内面に小さなかえりがみられる。
137	〃	第Ⅰ層	17.4	( 1.9)	12.0	ヘラ削りが一部みられ、口縁部はわずかに下方へ屈曲する。
138	〃	第Ⅲ層	—	( 1.8)	2.6	擬宝珠形のつまみをもつ。
139	杯	第Ⅱ層	16.4	3.2	11.4	体部は直線的に開く。
140	〃	第Ⅲ層	—	( 1.7)	7.8	わずかに内傾する高台をもつ。
141	椀	〃	17.0	( 3.3)	—	内黒の黒色土器であり、緩やかに立上り口縁部にいたる。
142	〃	〃	—	( 3.3)	7.0	内黒の黒色土器であり、断面三角形の高台をもつ。
143	杯	〃	9.8	2.9	6.8	ヘラ切りの底部をもち、内面にロクロ目を残す。体部は直立気味に立上る。
144	〃	〃	12.8	( 3.2)	—	わずかに丸味をおびた底部をもち、内外面ともにナデ調整。
145	〃	〃	11.0	3.9	6.0	ヘラ切りの底部から直線的に開く。内面にロクロ目を残す。
146	椀	〃	—	( 1.4)	6.0	小型の高台をもつ。胎土、焼成ともに良好。
147	〃	〃	—	( 1.3)	6.6	やや内湾する高台をもつ。

第7表 出土遺物計測表 8

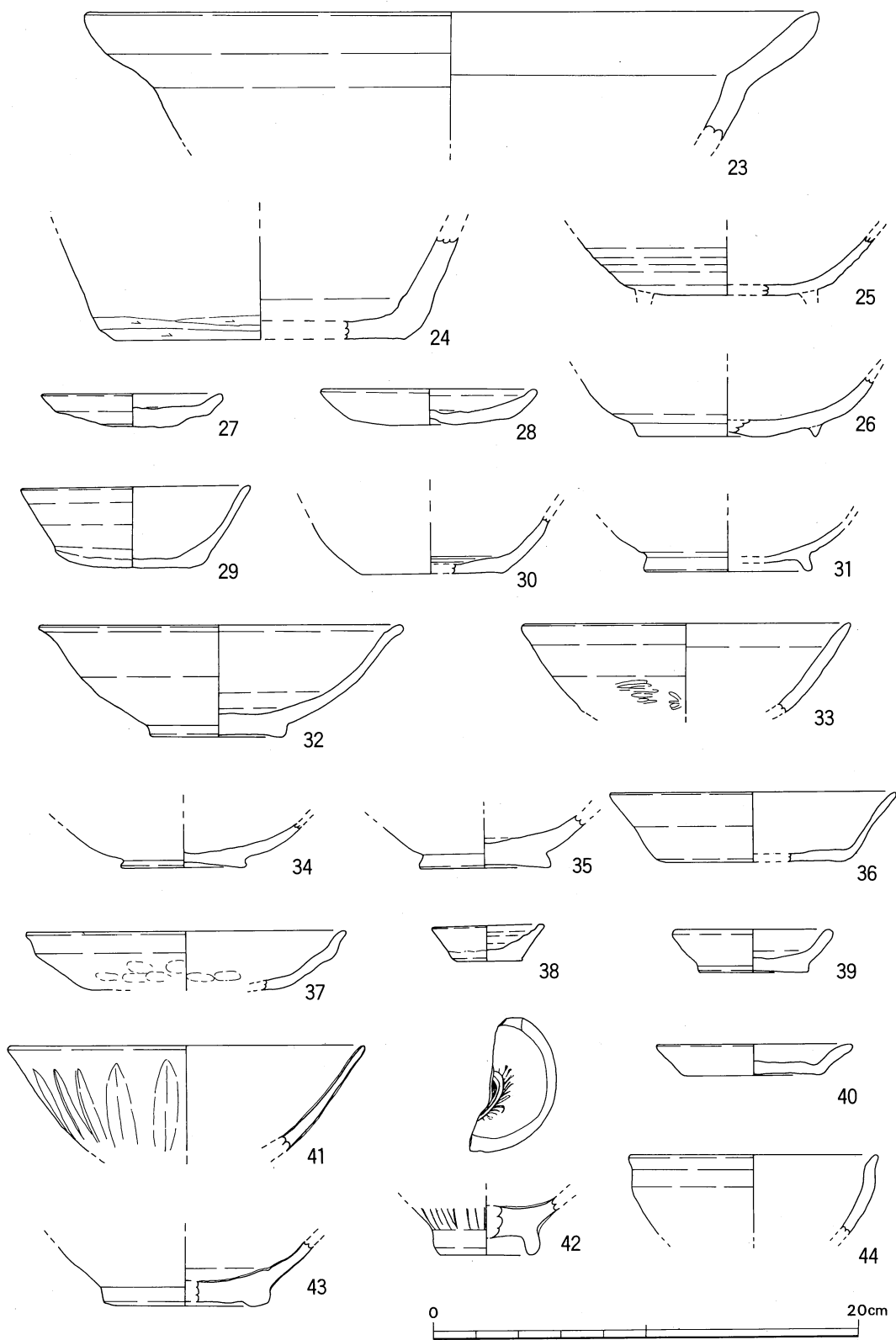
番号	器 種	出土層位 出土遺構	法 量 (cm)			特 徴
			口 径	器 高	底 径	
148	杯	第Ⅱ層	—	3.6	8.2	非常に高い高台をもつ。
149	小 皿	第Ⅲ層	6.4	1.7	4.6	回転糸切りの底部をもち、体部は強く屈曲し立上る。内外面にロクロ目を残す。
150	〃	〃	8.6	1.7	5.6	回転糸切りの底部をもち、内湾気味に立上る。
151	〃	〃	7.6	1.4	5.8	回転糸切りの底部をもち、直線的に開く。内面にロクロ目を残す。
152	杯	第Ⅱ層	12.6	3.1	3.8	回転糸切りの小型底部をもち、大きく直線的に開く。内面に強くロクロ目を残す。
153	〃	〃	12.6	3.1	3.8	〃
154	〃	〃	11.9	3.6	3.6	〃
155	青 磁	第Ⅲ層	—	( 2.3)	5.3	やや低い高台をもち、外面のみ施釉。内面見込みには「金玉満堂」の押印あり。薄緑色に発色。
156	白 磁	第Ⅰ層	16.0	( 2.4)	—	玉縁状の口縁部をもつ。
157	〃	第Ⅱ層	17.6	( 2.4)	—	〃
158	〃	〃	16.0	( 3.7)	—	〃
159	染 付	第Ⅲ層	10.7	2.8	5.6	外面に葡萄唐草文、内面にも唐草文がみられ、内外面口縁部に界線をもつ。
160	〃	〃	—	( 2.1)	—	外面に唐草文、内面に羯磨文がみられる。
161	杯	S K 65	—	( 1.8)	5.8	回転糸切りの底部をもつ。
162	甕	S K 68	26.3	( 5.5)	—	やや外傾する口縁部であり、内面に粘土帯の接合痕がみられる。
163	〃	S D 44	24.0	(20.0)	—	直立気味に開く胴部に、わずかに内湾する口縁部をもつ。外面上胴部に細いハケ目、下胴部には縦方向のハケ目がみられる。
164	壺	〃	—	(10.9)	8.5	長頸壺と考えられ、頸部は欠損する。肩部は強く張り屈曲する。やや外傾する高台をもつ。
165	〃	〃	—	(10.3)	—	広口壺の口縁部であり、大きく開く。ハケ状工具による押圧文がみられる。
166	小 皿	S D 45	9.0	1.6	5.2	回転糸切りの底部をもち、内面にロクロ目を残す。
167	〃	〃	9.0	2.6	5.8	高い高台であり、体部は浅い。
168	碗	〃	17.6	( 2.9)	—	緩やかに開く口縁部であり、部分的にへラ磨きが施されるが磨耗する。

第7表 出土遺物計測表9

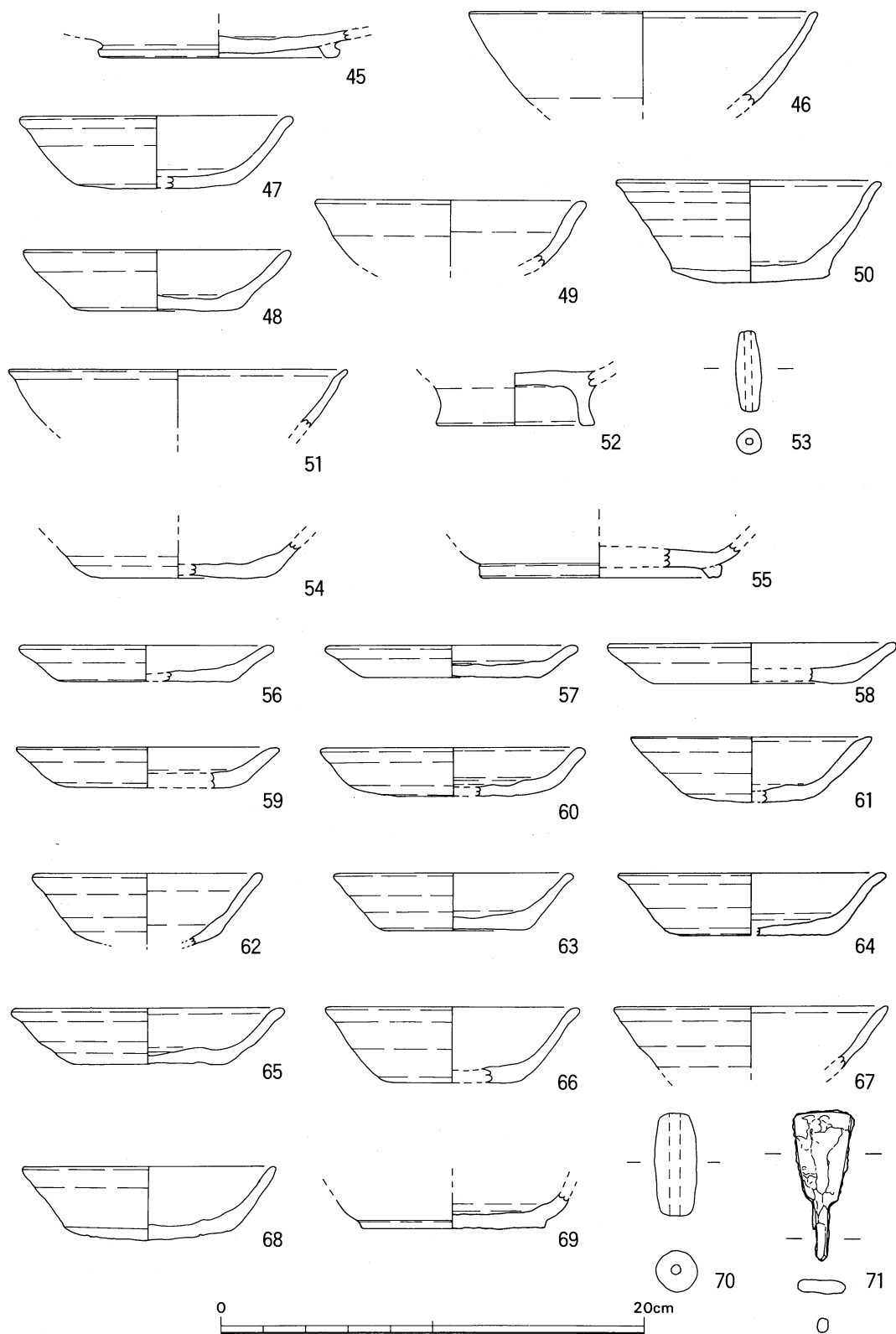
番号	器 種	出土層位 出土遺構	法 量 (cm)			特 徴
			口 径	器 高	底 径	
169	碗	S D 45	—	( 3.4)	7.0	回転糸切りの底部に低い高台をもつ。内面にはロクロ目を残し、外面高台脇にヘラ削りがみられる。
170	鍋	〃	19.8	( 3.8)	—	土師質の鍋であり口縁下に断面三角形の小さな鏝をもつ。鏝の下には煤が付着する。播磨産か。
171	杯	P 1	11.2	3.7	4.4	回転糸切りの底部をもち内面にロクロ目を残す。体部は直線的に開く。胎土、焼成ともに良好。
172	〃	〃	10.2	3.6	4.2	〃
173	〃	〃	10.6	3.4	4.8	〃
174	〃	〃	10.2	3.5	4.0	〃
175	〃	〃	10.7	3.5	3.7	〃
176	染 付	P 2	12.0	1.6	—	外面に唐草文がみられる。
177	鍋	P 3	22.2	( 8.2)	—	瓦質の鍋であり、口縁部外面に粘土帯の接合痕がみられる。
178	杯	P 4	13.6	( 3.7)	—	直線的に開く体部をもち、外面にロクロ目を残す。
179	甕	P 5	—	( 7.6)	11.0	甕底部である。
180	小 皿	P 6	9.0	1.7	6.0	ヘラ切りの底部であり、内面にロクロ目を残す。
181	〃	〃	9.6	1.7	7.4	ヘラ切りの底部をもち、口縁部は大きく開く。
182	〃	〃	9.5	1.2	5.8	ヘラ切りの底部をもち、口縁部はやや内湾し開く。
183	渡 来 銭	P 1	—	—	—	「祥符通宝」であり、北宋銭である。 大中祥符 (1008～1016年)



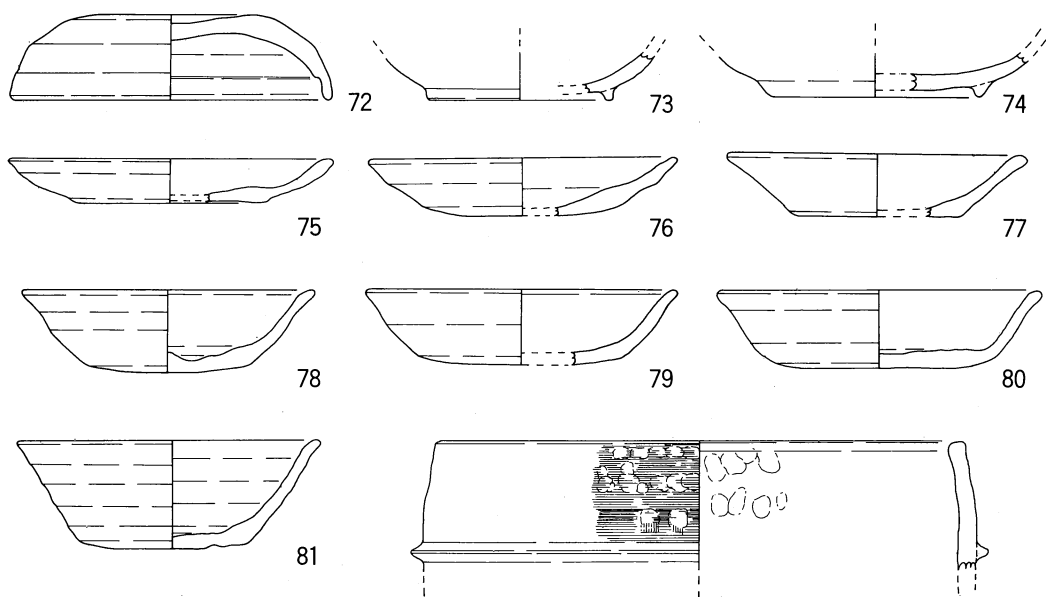
第18図 松ノ下地区包含層（第Ⅲ・Ⅳ層）出土遺物



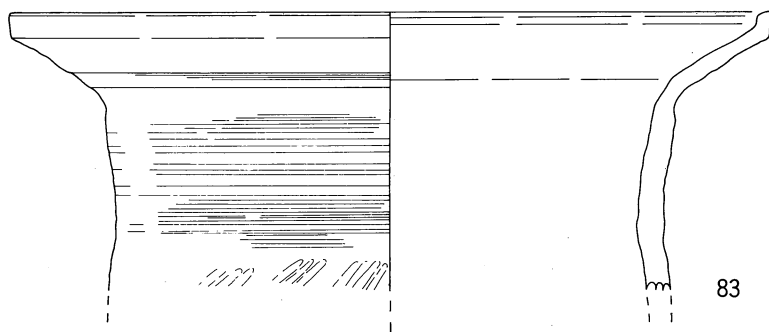
第19図 松ノ下地区包含層（第Ⅰ・Ⅲ層）出土遺物



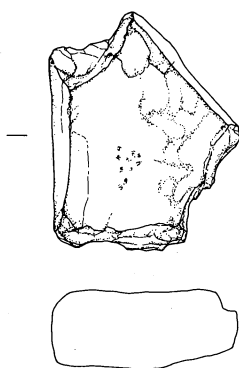
第20図 松ノ下地区遺構 (S K56・59~61) 出土遺物



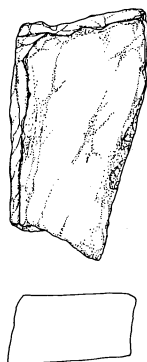
0 20cm 82



83



84



85



86



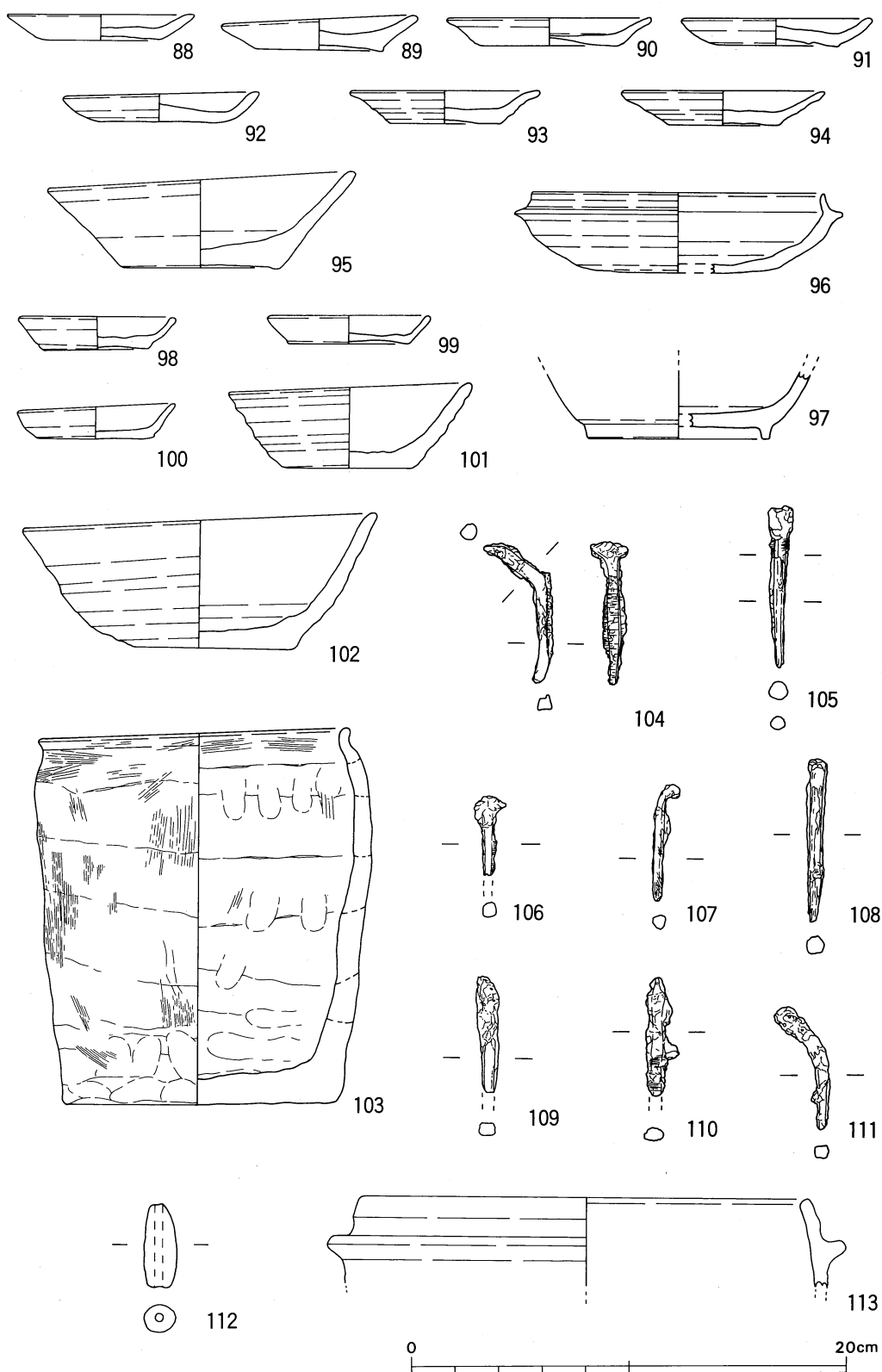
87

0 20cm

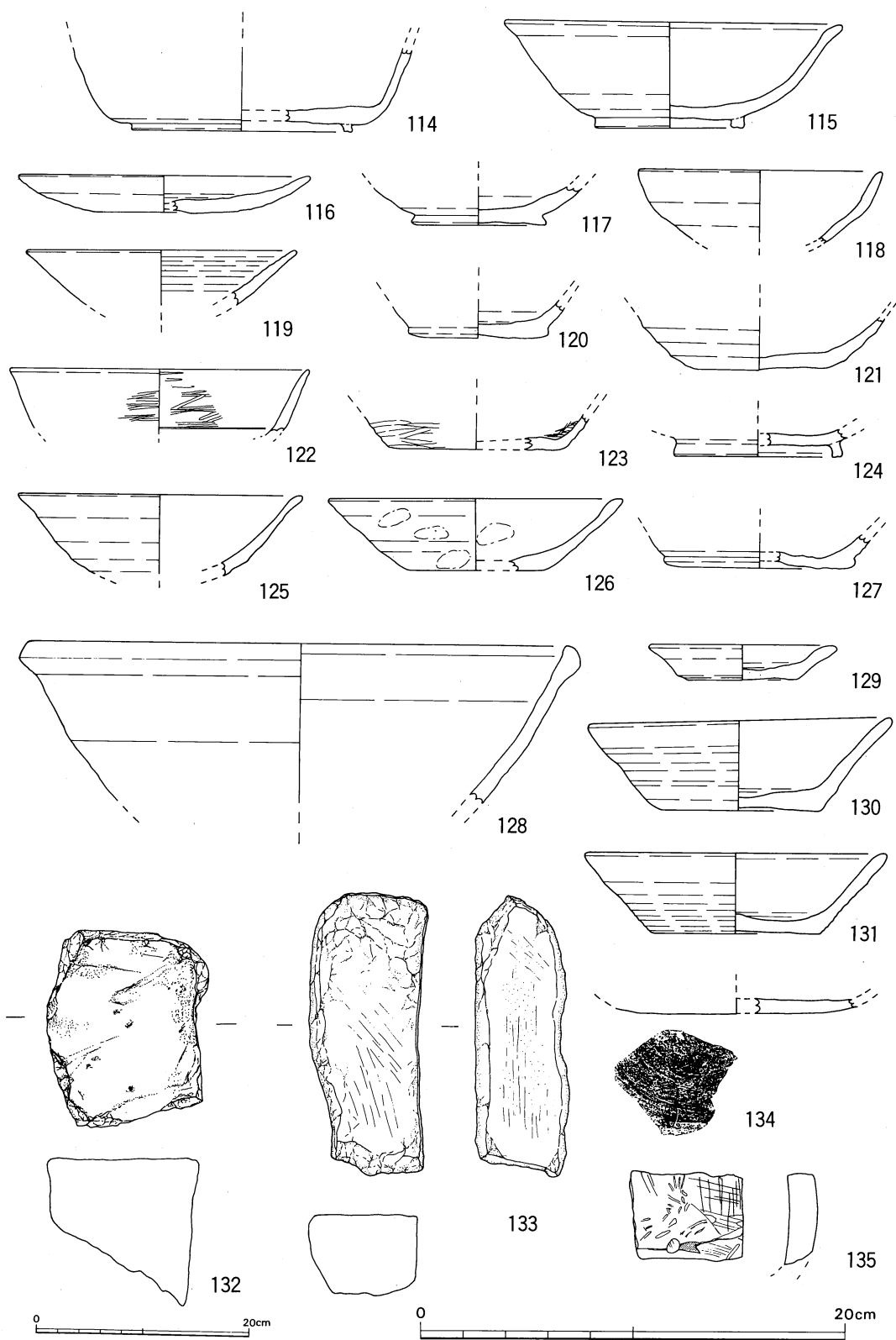
0 20cm

第21図 松ノ下地区遺構 (S K63) 出土遺物

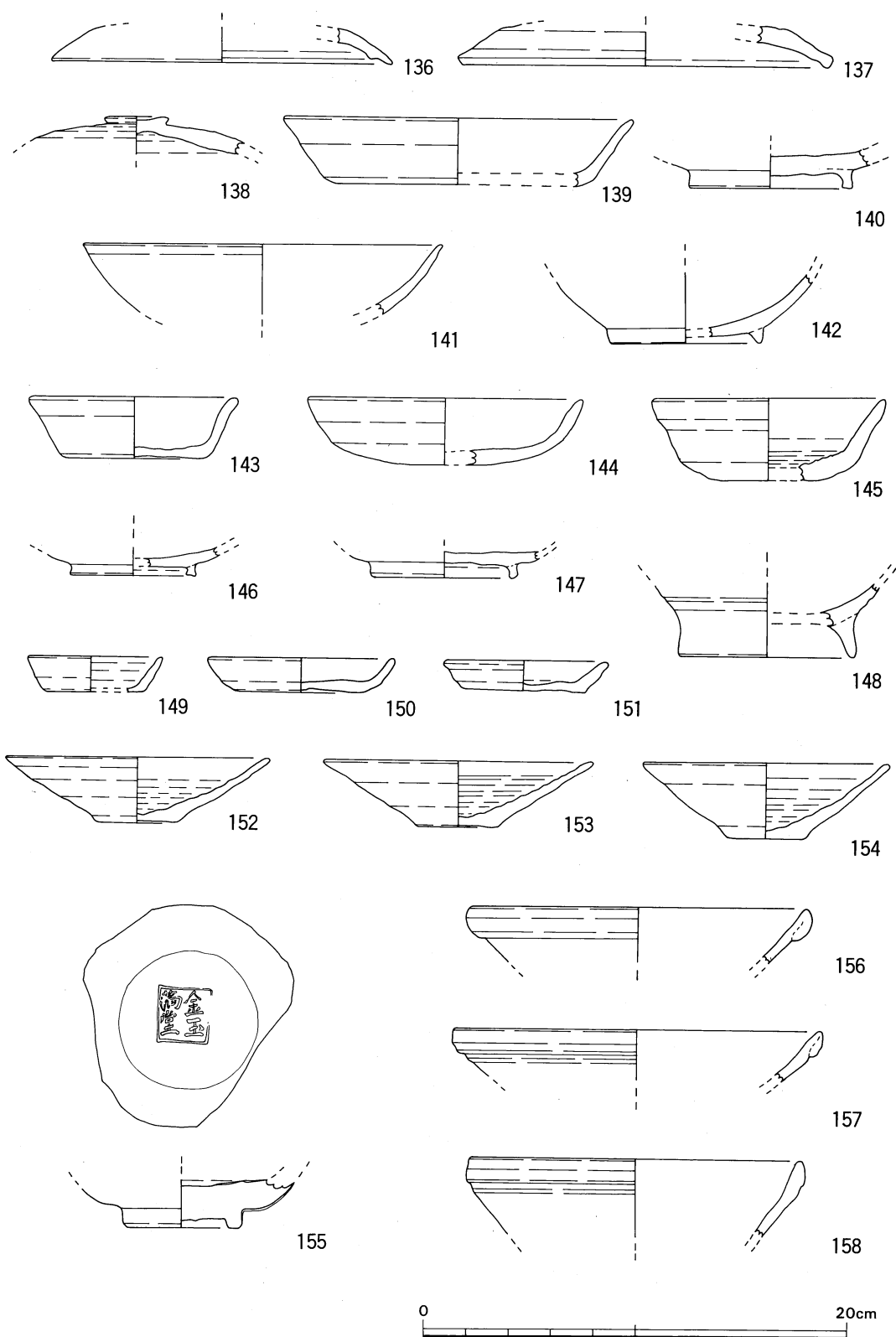




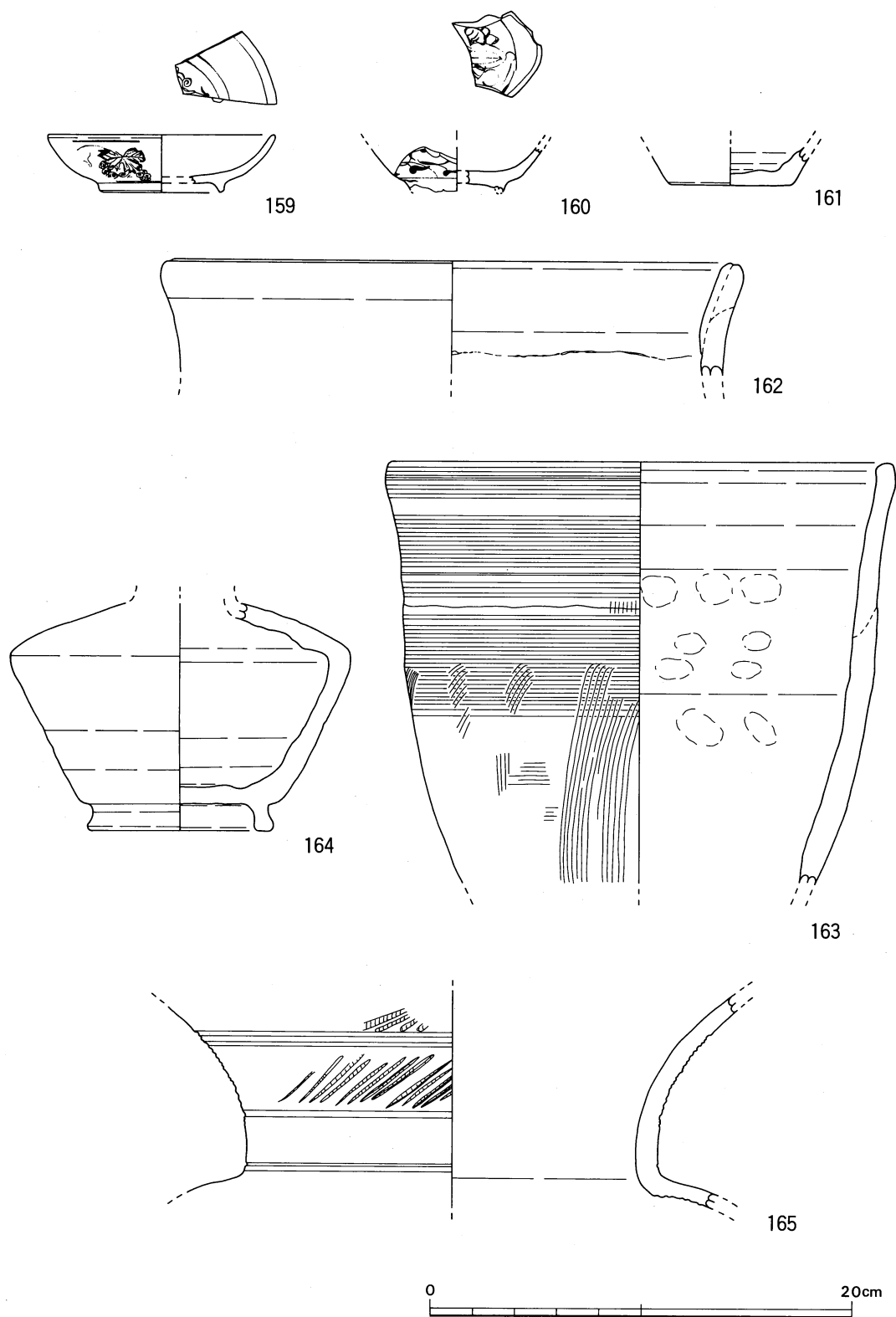
第22図 松ノ下地区遺構 (S K64, S T18, S D41, 集石墓, P1・2) 出土遺物



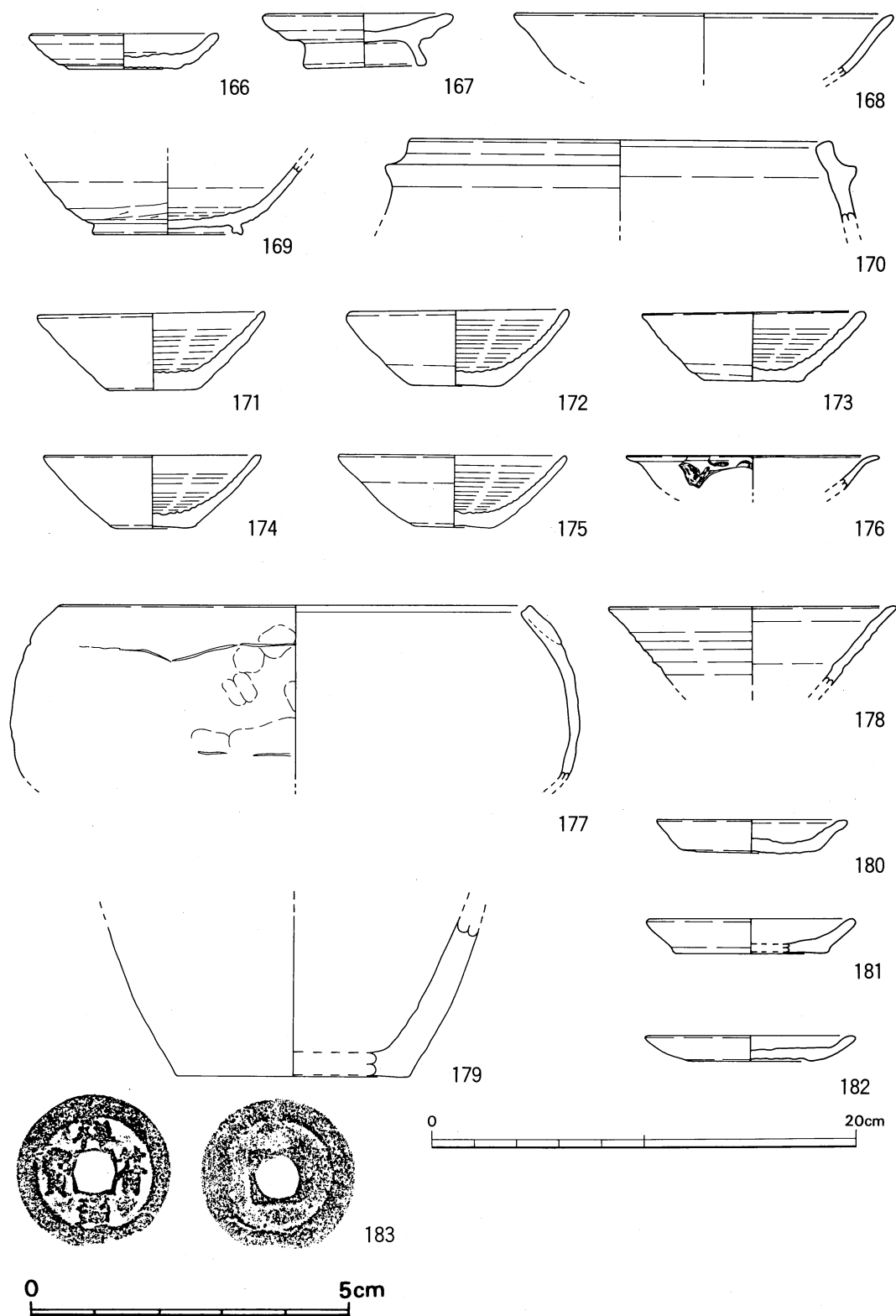
第23図 松ノ下地区遺構 (P 3~23) 出土遺物



第24図 南屋敷地区包含層（第Ⅰ～Ⅲ層）出土遺物



第25図 南屋敷地区包含層（第Ⅲ層），遺構（SK65・66，SD44）出土遺物



第26図 南屋敷地区遺構 (S D45, P1~6) 出土遺物

# 版 図



国 衙 航 空 写 真



松の下地区調査前全景（西より）



遺構検出状態（南より）





遺構完掘状態（南より）



遺構完掘状態（南より）



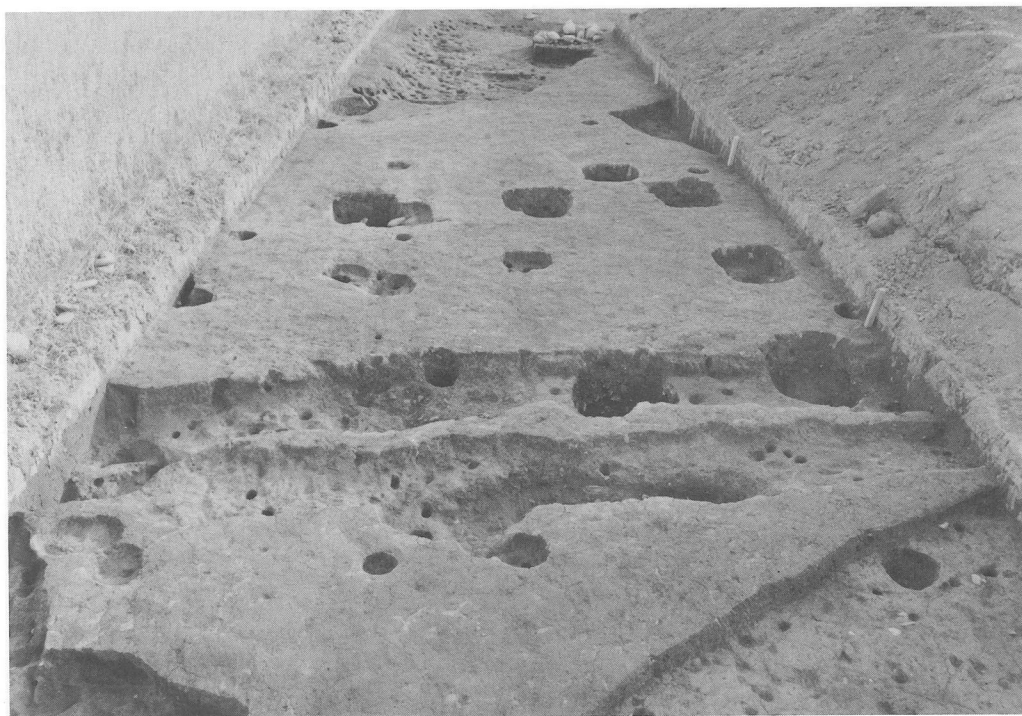
SB44, SD40・41検出状態（北より）



SB44, SD40・41検出状態（南より）

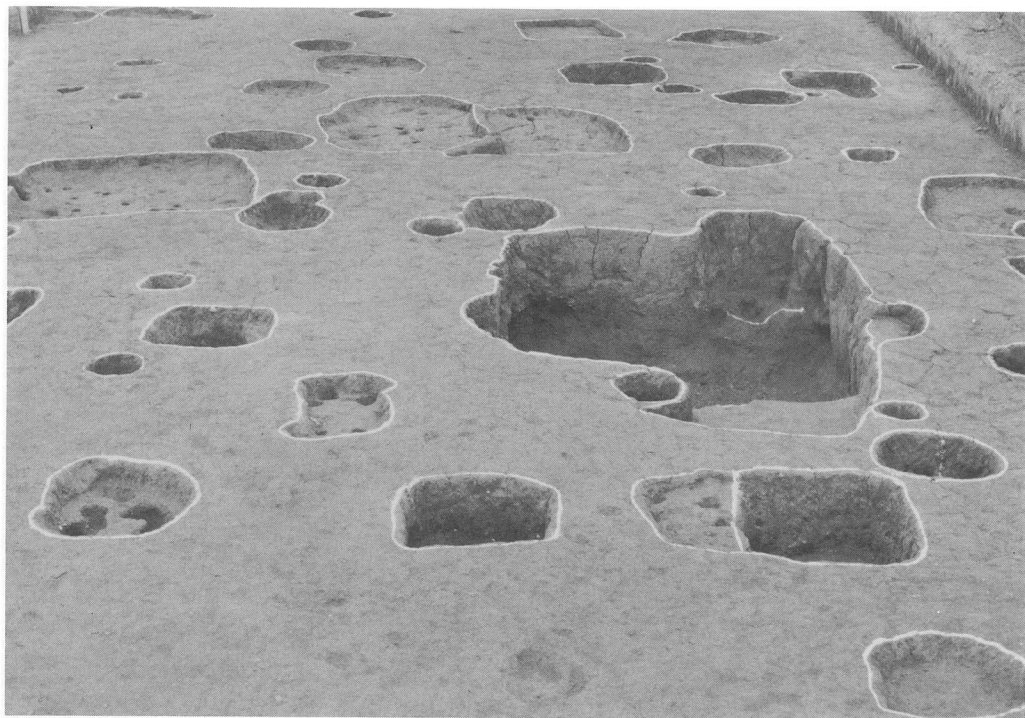


S B44北柱穴検出状態（北より）

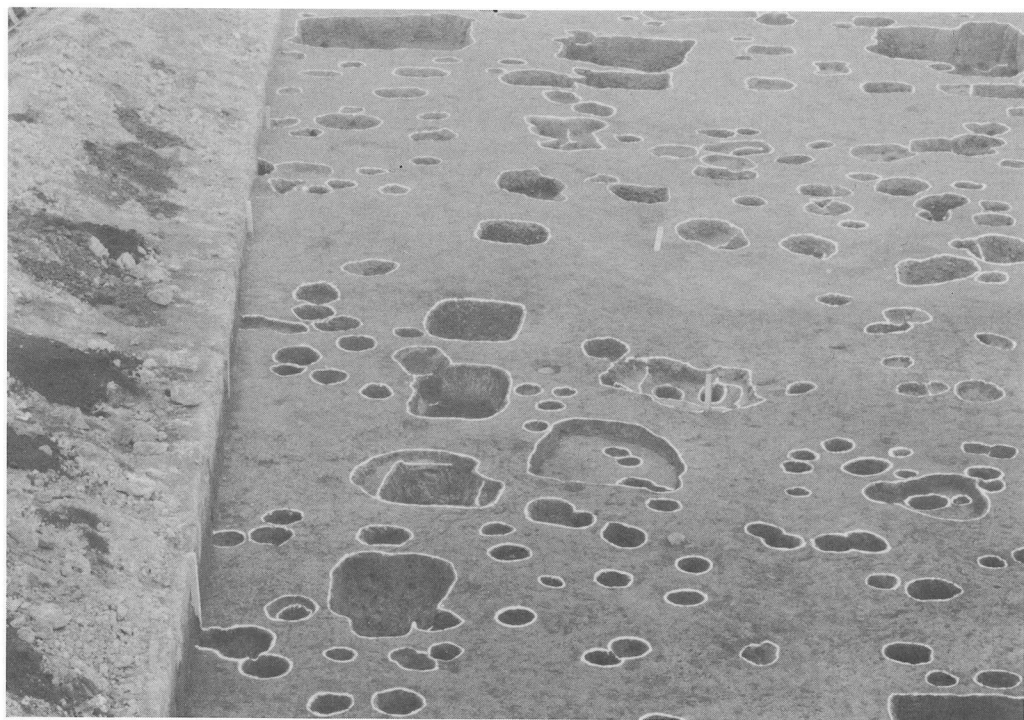


S B44, S D40・41（北より）





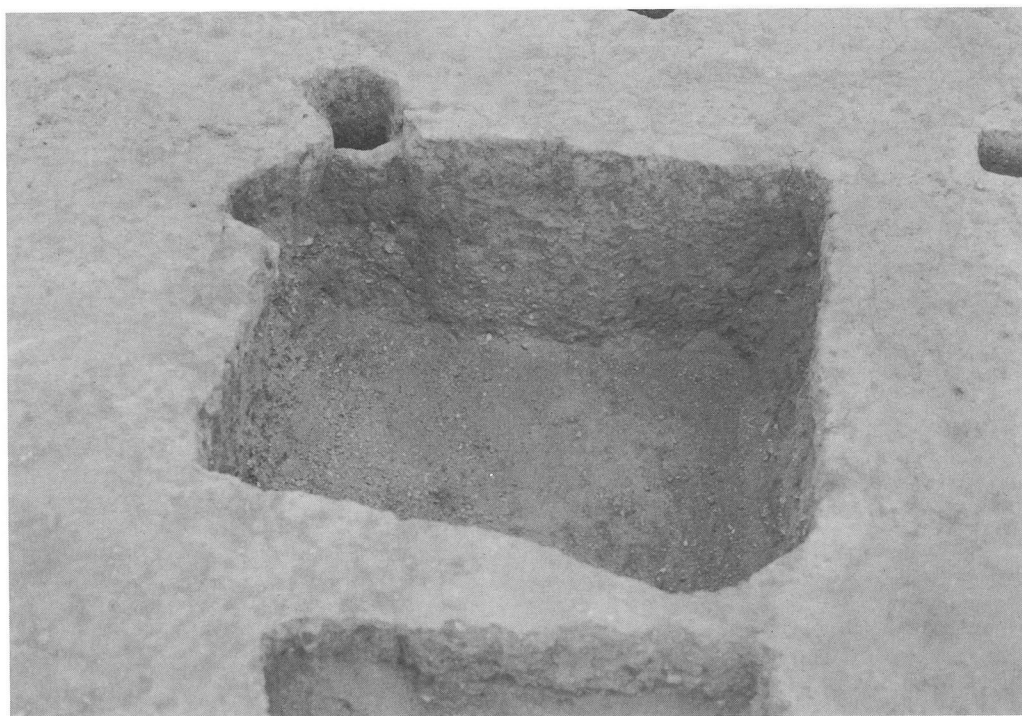
SB45 (南より)



SB46・47 (南より)



SK59 (南より)



SK61 (南より)



S K63 (南より)

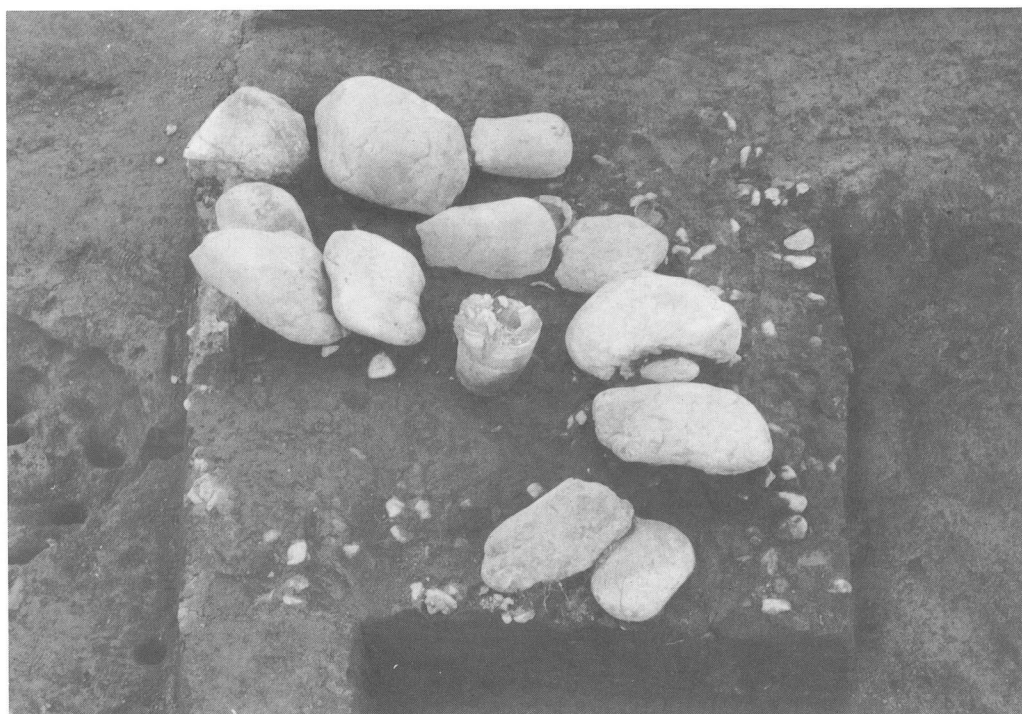


S K61遺物出土状態 (東より)

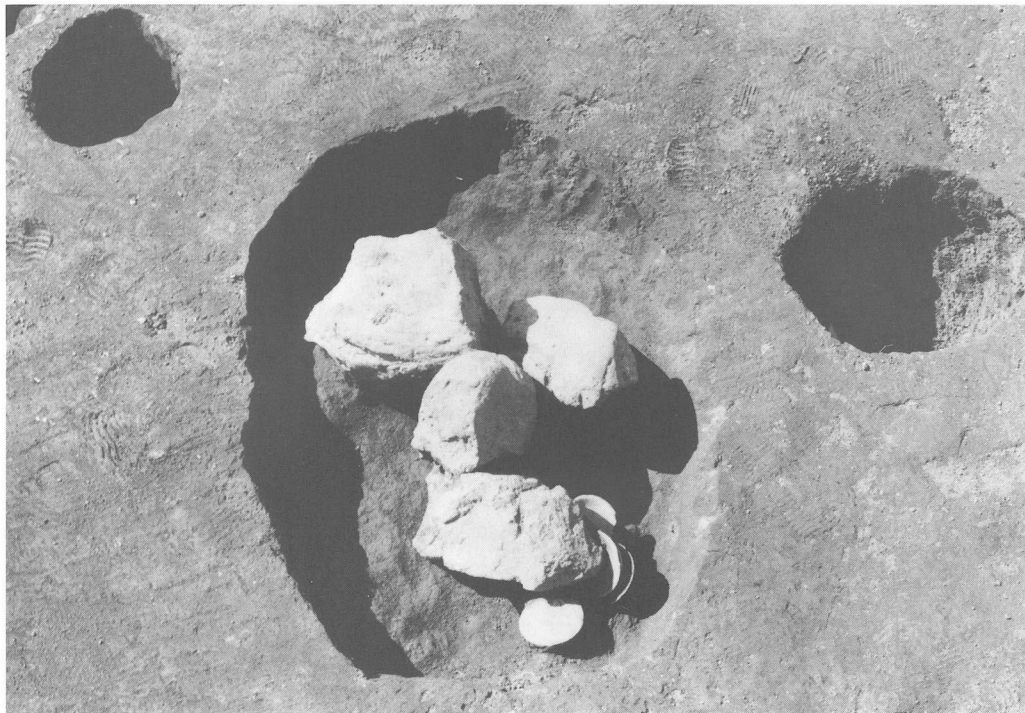




集石墓検出状態（南より）



集石墓（東より）

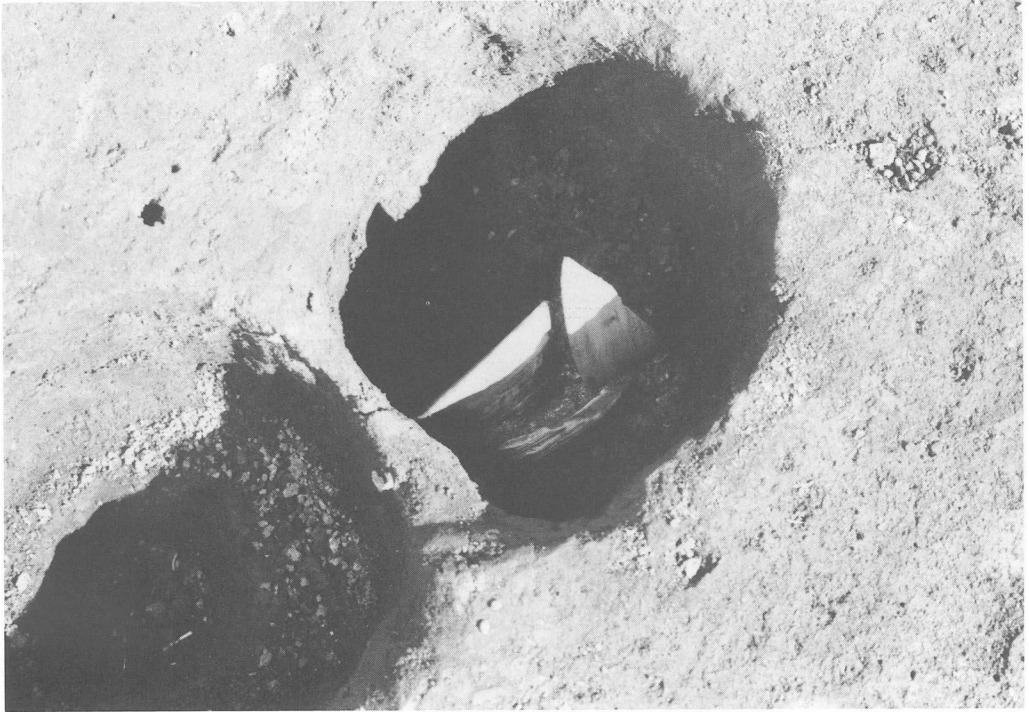


S K 64 (南より)

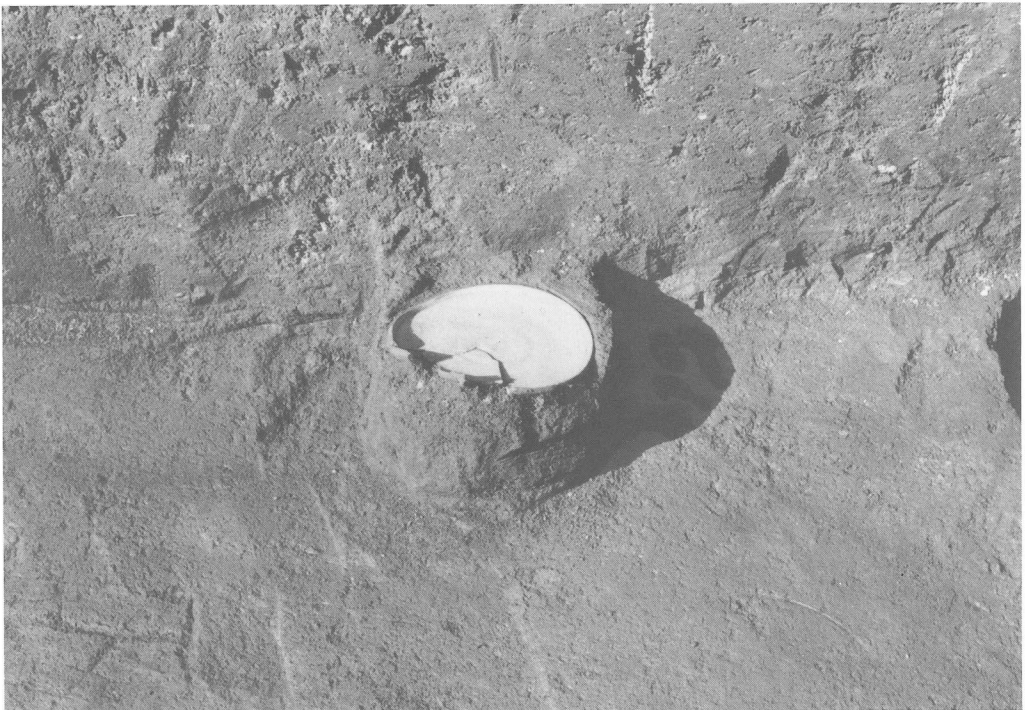


P 4 遺物出土状態 (南より)





P19遺物出土状態（南より）



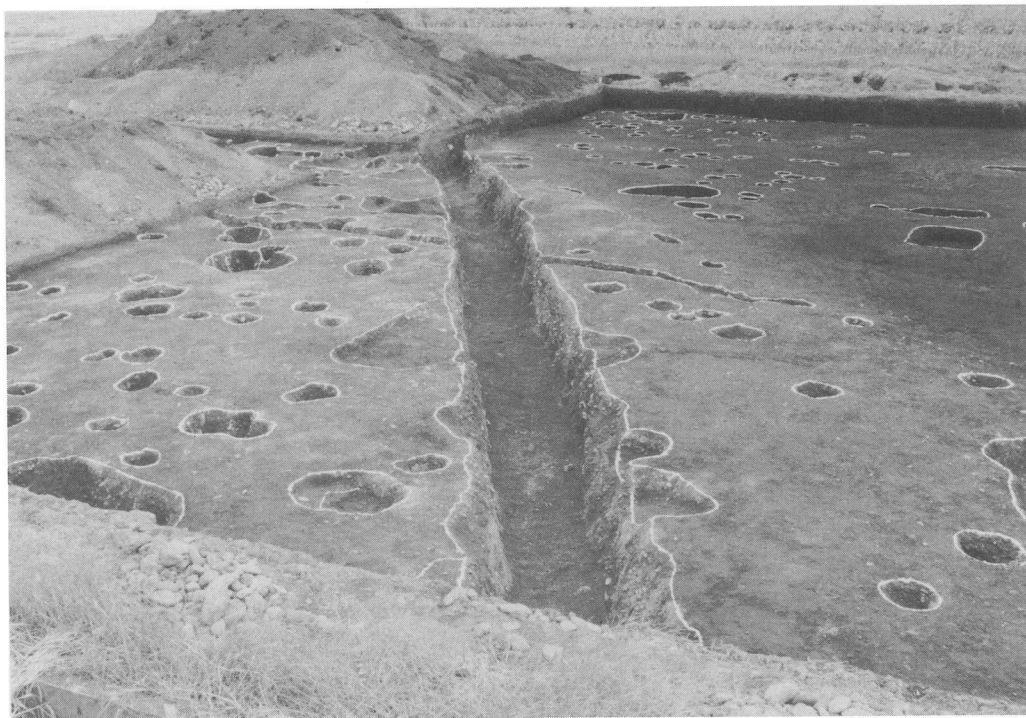
第Ⅳ層遺物出土状態（東より）



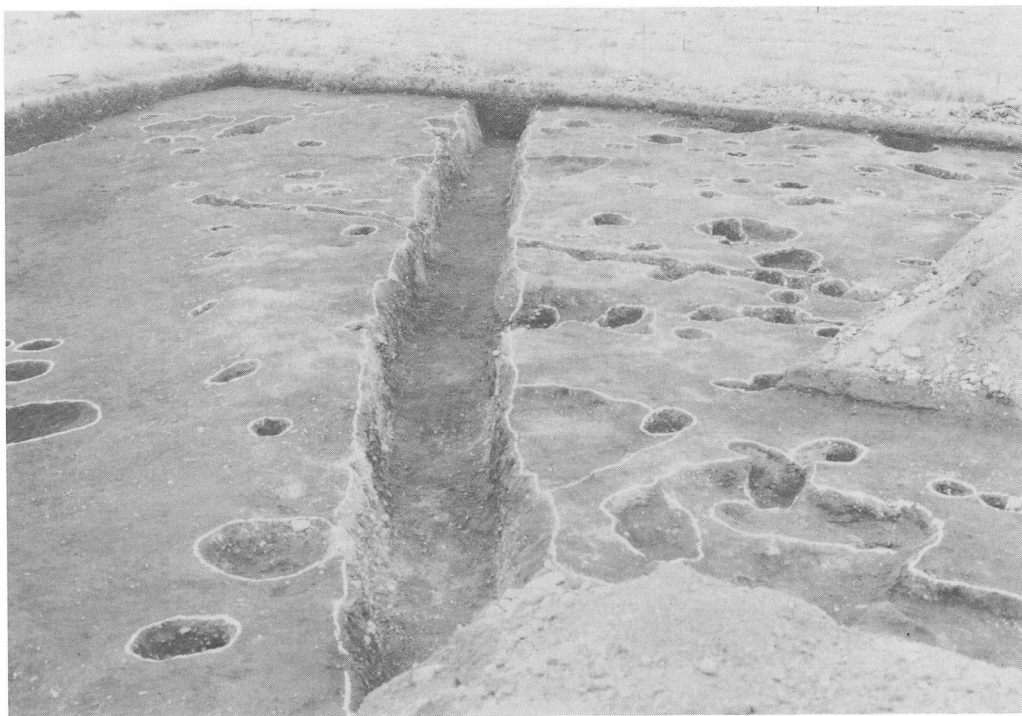
南屋敷地区調査前全景（西より）



遺構完掘状態（南より）



SD44 (南西より)



SD44 (北東より)





SD44西壁セクション



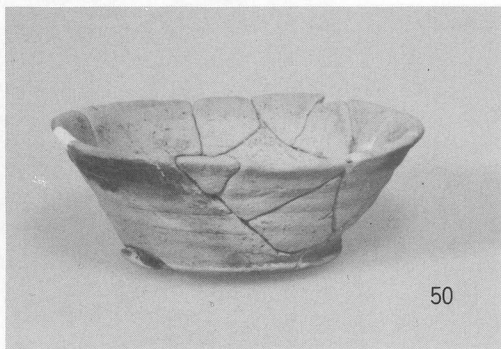
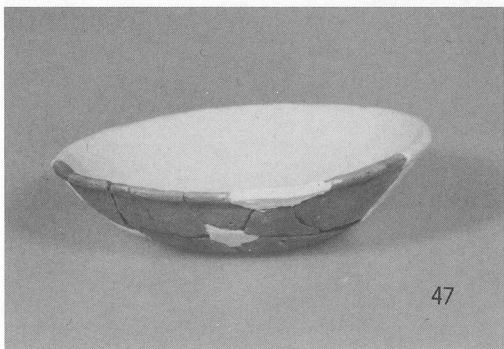
SD44遺物出土状態（北東より）



SD45東壁セクション

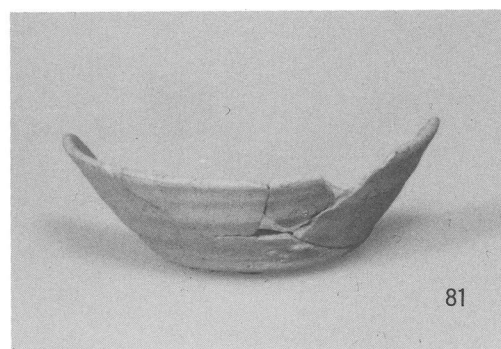
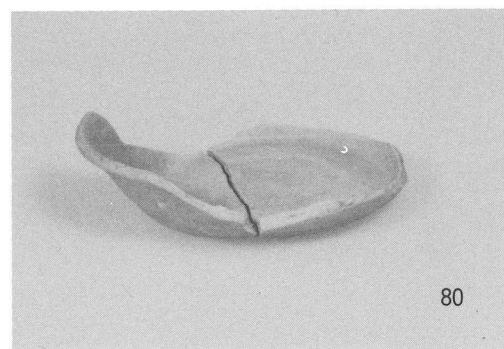
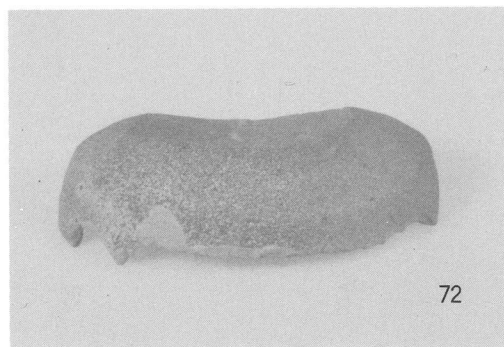
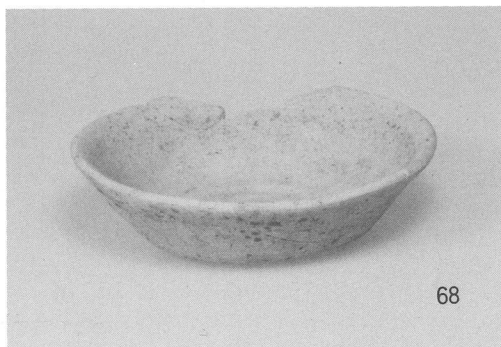


P1 遺物出土状態 (南より)



松ノ下地区包含層（第三・IV層），SK59出土遺物





松ノ下地区 S K 61・63・64出土遺物



松ノ下地区SK64, 集石墓出土遺物





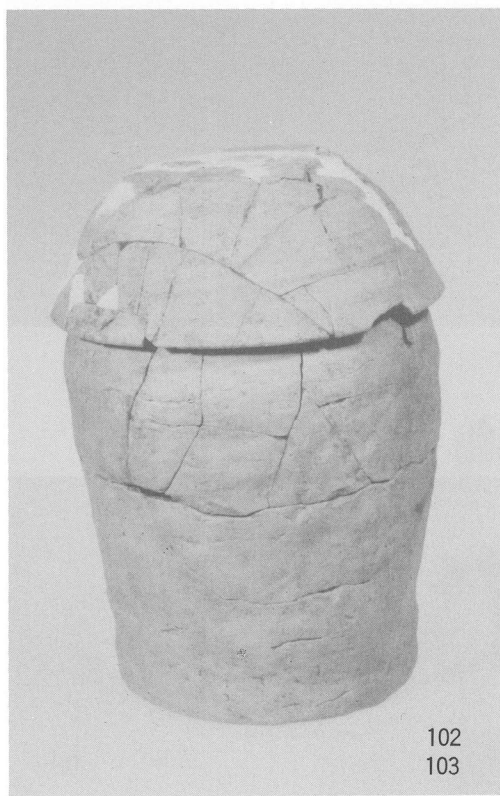
101



102



103



102  
103



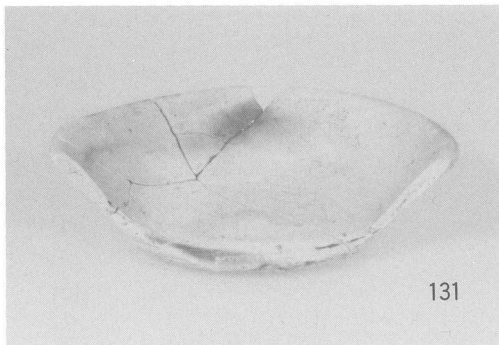
115



129



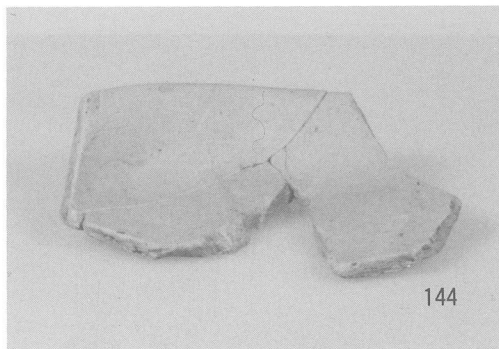
130



131



143



144



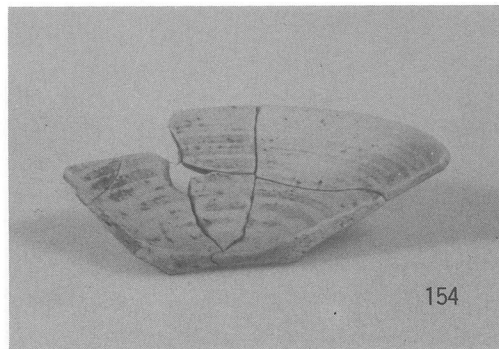
151



152

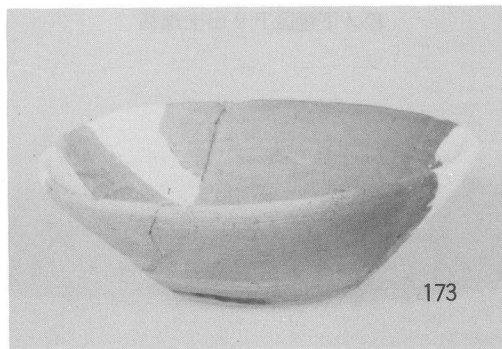
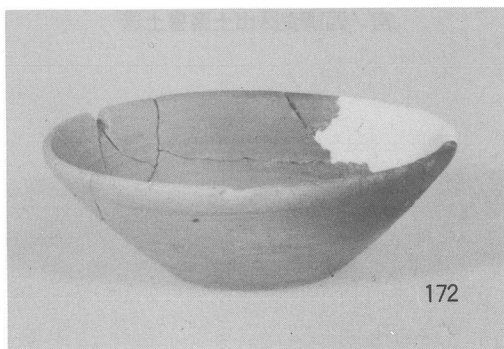
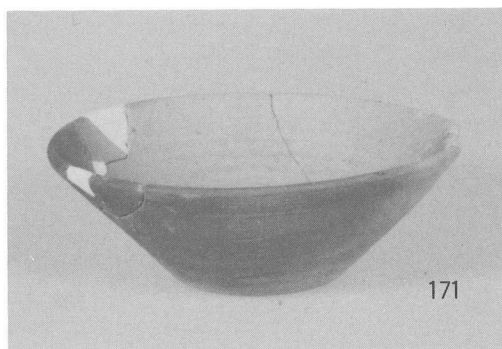


153



154

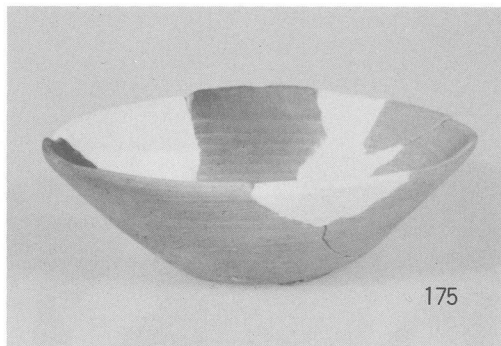
松ノ下地区 P19・20, 南屋敷地区包含層 (第Ⅲ層) 出土遺物



南屋敷地区SD44・45, P1出土遺物



174



175

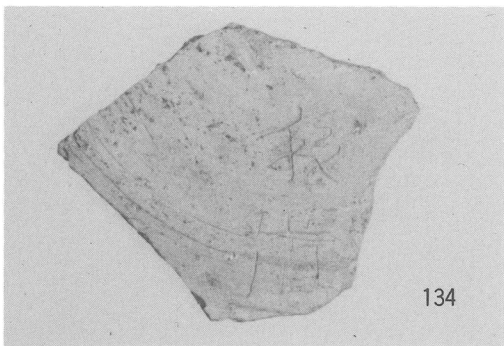


180



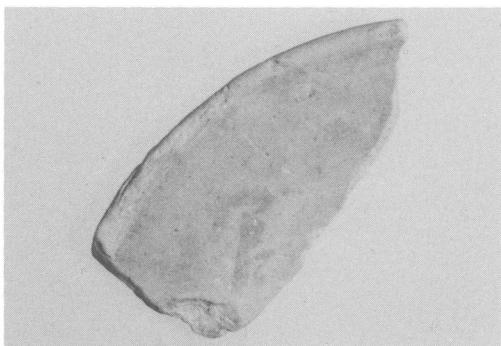
182

南屋敷地区 P 1・2 出土遺物



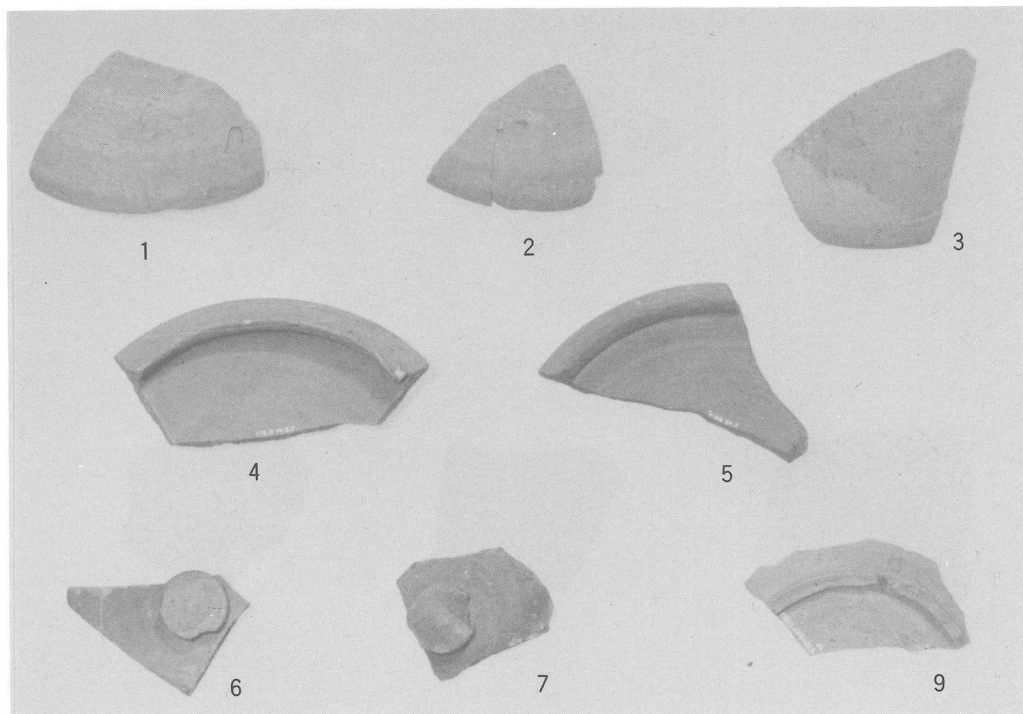
134

松ノ下地区 P 9 出土遺物

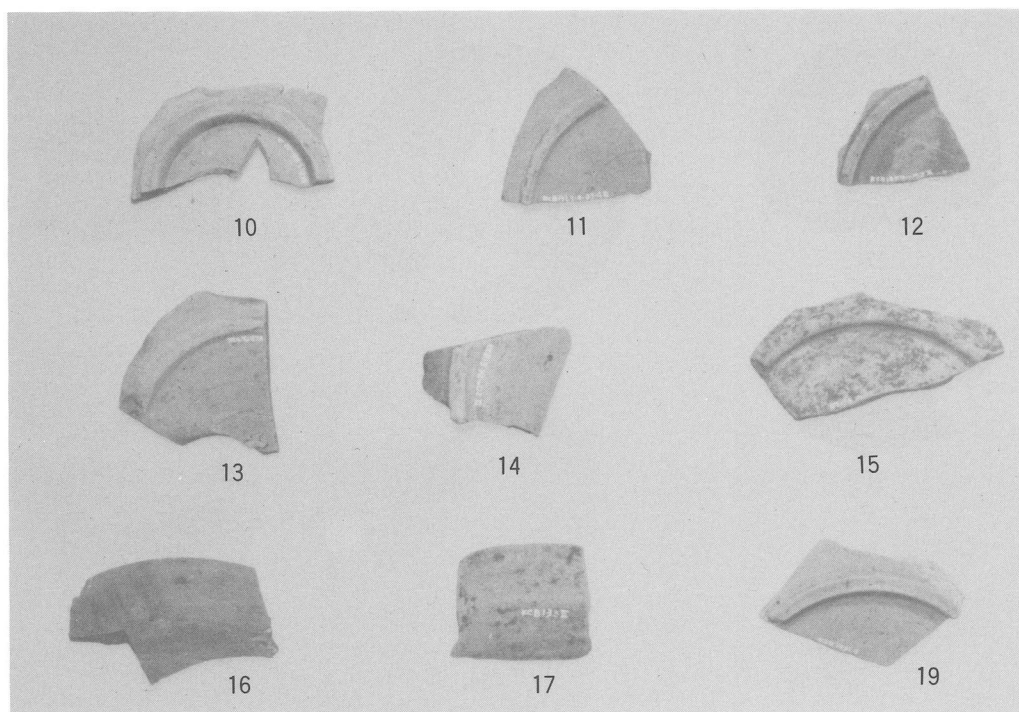


宮ノ西調査区出土墨書土器





松ノ下地区包含層（第Ⅲ層）出土遺物



松ノ下地区包含層（第Ⅲ・Ⅳ層）出土遺物